

進藤虚舟著

白粉を洗い
後一多流
耶蘇魚



東京東洋堂梓

自序

今日世界に尊奉せられて居る宗教の分ち方に就いては、色々異説もあるが、通俗的に之を區別すると、回教、道教、儒教、佛教及び耶蘇教の五つと爲すことが出来るであらう。

此の五大宗教の中で、耶蘇教は専ら西洋に崇拜せられて、其の他の宗教は主に東洋に行はれて居る。耶蘇教國の人民は、耶蘇教國人民を如何にも文明開化の人民の様に思ひ、耶蘇教外の國民は野蠻未開の人民であると嘲笑して居る、而已ならず東洋

の國民と聞けば、猿か豚の様に心得て、一種劣等の人種なるやに考へ、之れと齡するを恥づる有様である。殊に最も不條理極まつて居るのは、國交際上に迄、耶蘇教國間にあらざれば、對等の條約は出來ぬなど、言つて、勝手氣儘を働き、亂暴、壓虐、欺瞞、惑亂等、有らゆる惡徳を以て異宗教國に加へて居る。

自分は耶蘇教に就きては多少の研究を爲した者である。研究の結果、翅に耶蘇教の眞理ある宗教として尊敬を拂ふ値無きとを發見したるのみならず、

ず、丸切り嘘八百のもので、耶蘇教を信する徒は、反て無學文盲であるといふとを知つた。殊に昨年來、汎く西人の耶蘇教を研究せる著書を涉獵して、益平生の自信を固くするを爲つた。因て先づ第一着に此書に於て耶蘇其者の眞相を暴露し、次に其の教義の不合理なるに論及し、斯の如き宗教を信ずると否とに依り、國民の文野を區別するとの極めて滑稽なるのみならず、世道人心の上よりして、斯る妖怪なる宗教は、痛棒一打して之を細粉微塵に破碎せなければならぬ。是れ此書を著作した

4
次第である。

明治三十五年七月五日

著 者 載

目 次

1

緒 言	一
第一 四福音書は如何にして纂めたものか	二
四福音書と狐狗狸さんと	二
第二 耶蘇の誕生	六
叩き大工の後妻	七
女髮結の私生兒	七
第三 耶蘇は當時の人には名も顔も能く 知られざりし人なりしと	一二
第四 四福音書の略評、矛盾、剽窃、詐偽、捏造	一八
其一 耶蘇の生年月の捏造なるを、不明 なるを	二〇

其二 四福音書の剽窃、耶蘇教徒と強盜

ご……………二八

其三 預言、耶蘇の爲したる預言、耶蘇

につきたる預言、合ふも預言合は

ぬも預言……………三六

第五 耶蘇傳は釋迦傳より剽窃したるも

のなりとの説……………六一

第六 白粉を洗ひ落したる耶蘇……………八二

第七 耶蘇自身の説きたる教……………一〇五

第八 耶蘇教の教理……………一二三

耶蘇神の無學文盲なるを……………一二三

耶蘇の窃盜……………一二四

耶蘇教は多神教なり……………一二四

耶蘇教の神は金貨なり。舊約書は嘘

八百。舊約書の出版を禁止すべし……………一二四

第九 耶蘇教傳播の方法。血と火と……………一五六

第十 結 論……………一七一

白粉を洗ひ落したる耶蘇

進藤 虚舟 著

言



世の中に缺け古土瓶を大切にして居る者がある、其譯を
聞くに祖先傳來の品だからと云ふ、又詰まらぬ石を大切に
して居る者がある、其譯を聞くに崑崙山から來たのだと云
ふ、祖先傳來の品だからと云つて、缺け土瓶を大切にするの
は、人情として無理からぬ次第であるが、崑崙山は玉が出る
山だとして、其處から出た石まで大切にするのは、馬鹿の骨頂
である。

西洋人の耶蘇教を信じて居るのは、祖先傳來の品だから缺

土瓶と知りつゝも大切にするので、人情無理からぬ次第であるが、日本人の耶蘇教を尊奉するのは、文明國から來たと云ふので、詰まらぬ石までも大切にしてい居ると同じ事だ、誠に笑止千萬である、其耶蘇教を二十世紀大舉傳道など、云つて、騒ぎ立てる人々の居るのは、さういふ次第であるか、逆も正氣の沙汰とは思へぬ、氣の違つて居る者に、理屈を言つて聞かされたとして、何の役にも立たぬが、責めては世の中の未だ氣の違はぬ人々に、缺土瓶は缺土瓶、石は石と、明白に分からせたいものである。

第一 四福音書は如何にして纂めた

ものか

四福音書と狐狗狸さんと

耶蘇教の經文中最も重要なものは、新舊兩約書であるが、舊約全書は耶蘇出世以前の事のみで、新約書の方は、耶蘇の一代記や、耶蘇の口から出た色々の言葉、直參の門人達の書いたものが集めてあると云ふことになつて居るから、新約書の方が最も大切な經文である。依て吾輩は先づ此新約書と云ふものが、何時頃如何にして出來たものか、又其中に書いてある事は、信據の出來るところか、出來ないところかと云ふ點から、論じて見やうと思ふ。

新約全書の中に、耶蘇の一代記が四通りあるが、其四通りは、昔から其れ丈けしか無かつたものか、若し又其れ以上あつたものとすれば、如何にして四通り丈け抜き出したかと云ふところが、第一に起る問題である、之れに就きては、四世紀頃に

生きて居た學者の書いたものが、今日迄唯一つ残つて居る、即ち亞歴山烈アレキサンダーの學者バツプスと云ふ人の遺稿中のシナエーゲシナエー云ふ編である、其中に書いてある所によれば、耶蘇紀元後三百二十五年に、羅馬の皇帝コンスタンタンが會頭となり、ニケアと云ふ處で三百十八人の僧侶が寄り集つて、澤山ある耶蘇の一代記の中から、何れが眞物であると云ふを極めたのである、所が其極め方が中々面白い、三百人餘りの僧侶が寄り集つて、互に自分の説を主張して、反對者の意見を攻撃し、罵詈譏を極めた結果、四十種の一代記を選び出して、先づ眞物と極めたが、四十種の一代記は、甲に書いてある事と、乙に書いてある事と、丸切り反對して居て、甲の白いと云ふ事は、乙は黒いと書いて居る、乙に虚言だと書いて

ある事は、甲には眞實だと云ふから堪まらない、是非其中に眞物と偽物とがあるに違はぬと云ふ所で、更に此四十種の中を選択する様になつたが、例の局量狹隘なる僧侶のことだから、悪口の言ひ合ひで、何時まで経つても始末が付かない、其處で止むを得ず、其四十種の書物を祭壇の上に載せて皆んなで

オー天に在ます我等の神よ、何卒此中にある一代記の御心に叶ふものあらば躍らせ玉へ、躍らせ玉へ、

と祈つた、すると不思議な事には、只今新約書中にある、四福音と稱する四種の一代記が、躍つて跳ね廻つたから、さてこそ之れが神の御心に叶つたものだ、と云つて眞物と極つた、斯ういう次第だと書いてある、一寸聞くと如何にも受取り

難い嘶であるが、日本でも下女だの子守だのが寄り集つて、煙管三本括つて、其上に盆を載せ、皆んなで「狐狗狸さん狐狗狸さん、何卒御廻りください」と祈禱すると、教育あるものや、男子がやつたら駄目だそうだが、無智なる婦女子等がやれば必らず廻るそうな、シテ見ると、何の受け取れぬこともない、祭壇に載せて祈禱をしたのは、全く狐狗狸さんの種類だ、妖怪學博士の好材料なのに、惜しいことには圓了先生が其頃に居られなかつた。

何れ追々後に此四福音書と稱するものゝ互に矛盾して居ることを述べるが、先づ第一に耶蘇と云ふ男は、ごういう男であつたかといふ事から始めやう。

第二 耶蘇の誕生

叩き大工の後妻

女髮結の私生兒

四福音書によれば、ヨセフと云ふ大工の女房の胎内を借つて御生れになつたと云ふのだが、第一に可笑しいのは、此大工の父親が二人ある事である、馬太傳第一章第十五節及第十六節によれば、ヨセフの祖父がマツタン、父親がヤコブと書いてある、路加傳第三章第二十三節及第二十四節によれば、ヨセフの祖父がマツタテ、父親がヘリと書いてある、マツタンとマツタテとは同人と見れば見られぬこともないが、ヤコブとヘリとは、如何に曲解しても同人とは見られない、普通の書物なら傳説の違ひと見ても宜いが、神が眞物と極めた書物で、而かも聖書は皆んな神の默示だと提摩太後書

第三章第十六節に書いてあるから、傳説の違ひなご、云ふと、直に天罰を受けて地獄へ落ちて仕舞ふから、左様は見られない、是非此處には一つの理屈を見出さねばならぬ、父親が二人あつて兩方共父親と云はるゝとすれば、姦夫の子と見るより外はなからう、そうすれば一人は戸籍上の父親で一人は肉牀上の父親となる譯だから、父親は二人あると云つたこと無理はない、神様の耶蘇は姦夫の子を父親として御生れなさつたと云ふすら既に不思議なのに、御當人の御生れなさつた時が猶更ら不思議だ、馬太傳第一章第十八節以下に

それイエスキリストの生れ給ふこと左の如し、其母マリアはヨセフと聘定を爲せるのみにて、未だ僧にならざりし時、聖靈に感じて孕みしが、其孕

みたると顯はれたれば、夫ヨセフ義人なるが故に、之を辱しむることを願はず、密かに離縁せんと思へり

とある、路加傳第一章第二十六節以下にも、聘定となつて未だ夫の處に行かざる間に懐胎したと書いてある、誠に不思議の次第である、御日出度い宣教師や信者達は、此點は何とも思つて居ない様だが、少しく學問もあり考もする人は、此點が餘程氣になるこ見えて、羅馬法王なども折々布令を出して、耶蘇は處女マリアの聖靈に感じて孕んだもので、決して私生兒でないこと云ふことを、信仰の箇條の第一にせよと嚴達して居る、英吉利、佛蘭西、獨逸あたりの有名の耶蘇學者や僧侶で、公然私生兒であると云ふことを明言して居る人が甚だ多い。

先に述べたニキヤアの會議で祭壇の上に載せられた四十種の書籍中、今日に残つて居るものがある、ヤコブス・トーマス・ニコメドス等の耶蘇一代記などはそれである、此等の書籍中に斯ういう事を書いたものがある、其れは猶太駐屯のカラブリア軍隊中の羅馬の軍人ヨゼフス・パンデラといふ優男が、ベツレヘムのマリヤと云ふ猶太の娘と通じて、耶蘇が生れたといふ事である、又其の中の書物にマリヤは女髮結であつたと云ふ事を書いてあるのもある、又エピファニウスといふ四世紀の初め頃に居た耶蘇教中の有名なる僧侶の書いたものによれば、彼の大工のヨセフは、マリヤを娶る頃は餘程の老人で、既に六人も小供を持て居た男だと云ふ事を書いてあるから、彼れ是れ比較して考へて見ると、マリ

アは女髮結だから、此連中には今日でも随分有り勝ちの事で、兵隊さんを色に持つて懷妊して困つたから、老人の大工の家へ後妻に行くこととしたのである、女髮結の事だから、口は中々達者で、亭主を丸めて、ヤレ聖靈に感じたの、天使が夢の中に見えたのと、甘く人前を胡魔化して居たのだらう、殊に其頃の法律即ちモーセの定めによれば、男を持ちながら處女だと言つた者は、石で撃ち殺さるゝ筈であつたから、亭主も女房が若くはあるし、美人ではあるし、一つ此處で命を助けてやつたら有難がつて、終には眞に己れを愛する様になるだらうと考へて、他人の兒と知りながらも、好い加減に自分の兒にして育てたものだらう、それとも女房の口に丸められて眞に聖靈に感じて生れたものと思つて居

たかも知れぬ、若しそれなら女髮結ごん誠に罪の深い譚だ、亭主の御目出度いのを好い仕合せにして……、左もなくば全体神様の兒が、叩き大工の後妻、女髮結の腹を御借りになつて、而かも厩の内、路加傳第二章第七節御誕生とは、誠に受取れぬ話である。

第三 耶蘇は當時の人には名も顔も

知られざる人なりと

四福音書によれば、耶蘇の生時の勢力と云ふものは、誠に凄まじいもので、猶太の人々が、時としては二三千人も、又時としては五六千人も隊を成して、後を附けて歩るゝと書いてある、夫れ程の有名な人を、愈々逮捕と云ふ時に、捕手の役人共が、耶蘇の顔を知らなかつたから、弟子のイスカリオテ

のユダと云ふ者を語らつて、其接吻するのを合圖として、捕縛したと書いてある(馬太傳第二十六章、馬可傳第二十五章、路加傳第二十二章)それ程有名なる人を、弟子を頼まなければ知つた者が無かつたと云ふのは不思議である、又たユダの骨折料として得た金は漸く銀三十である(馬太傳第二十六章第十五節及第二十七章第三節)銀三十は高くて百五フランで、我が四十圓程に當る、時代の差異もあらうが、之が骨折料としては、ナット廉い様である、シテ見ると自然耶蘇といふ男は、果して四福音書に書いてある如く、生時有名な者であつたか否かは甚だ疑はしい。

耶蘇と同時に猶太の學者で、フヒロと云ふ人が居た、又た三十四年程後ちで、フラビウス・ヨゼフス及チベリアスのユ

スツスと云ふ猶太の學者が居た、皆な歴史を書いて居るが、一言も耶蘇と云ふ者が居て人を教へたとは書いて居ない、九世紀にコンスタンチノープルにフォナウスと云ふ耶蘇教の僧がナベリアス市のユスツスの猶太國王紀略と云ふ書を読んだが、救世主の降り給ひしと、及其事蹟に就ては一言もなかつたと書いて居る、フラビウス・ヨゼフスの書いた猶太古代史と云ふ書に、耶蘇の事が二個處出て居るが、其の一個處は同書第十二卷第九章にヤコブと云ふ罪人が罰せらるゝ處に、此罪人はキリストと呼ばれたる耶蘇の兄弟なりと書いてある、今一個處は同書第十八卷第三章に

其頃耶蘇と云へる者あり、彼れは賢人なりき、若し彼れを人と云ふべくんば、そは彼れ多くの不思議なる業を爲し、眞理を愛する人々の師となり、多

くの猶太人異邦人彼れに隨へり、彼れは即ちキリストなり、人民の訴へにより羅馬の方伯ピラト、彼れを十字架に懸けしも、初めよりキリストに隨ひし者は彼れを棄てざりき、彼れ死して三日にして蘇生り、豫言者達の彼れに就て云へる如く種々の奇蹟をなせり

と書いてある、併し第一節は疑ひもなく後人の竄入である、第一ヨセフスが書いたとすれば甚だ滑稽千萬で、ヨセフスは猶太教の極堅い信者であるとは、其著述の前後で能く分つて居る、其猶太教の者が、耶蘇を神と云はぬ許りに、若し人と云ふべくんば賢人だとか、眞理を愛する人々の師だとか、死してから三日で蘇生したとか、神の預言者達が彼れに就て陳へ置きたる種々の不思議なる業をしたとか云ふ筈がない、若し夫れを事實と思つて居る位なら、早速平身低頭し

て灰でも被つて耶蘇教に改宗して居る筈だ、第二には此文句のある所が奇体である、初めに猶太の賤民が騒いで兵隊から打擲された話と、イーシスの僧侶が神様だと言つて欺まして女を或る姪亂な男に夜なく密會せしめて、錢を取つた話と、兩方の話の間に何の關係もなく、唯だあれだけの文章を挿入してあるのだから、猶更笑止の至りである、斯ういう次第だから、此文章は耶蘇の僧侶共が己れの都合の善い爲めに、捏造して挿入したと云ふとは、獨り吾輩丈けの臆斷のみではない、古から眼あつて見る者は、皆そう言つて居る、デ西洋に於ても如何なる曲學阿世の徒と雖も、眞逆此文を眞實と言ふその出來ない爲めに、其一部分だけが本當であると曲解して居る、昔時はヨセフの書中に、此文句の無かつたと

は、三世紀の始めの耶蘇教僧侶オリゲネスが當時の哲學者ナエルズと云ふ人の説を駁した書の第一卷第四十八章にヨセフは慥に耶蘇を救世主と思つて居ないと書いてあるので知れる。

彼の四福音書と云ふものは、今日耶蘇教學者の研究した所に依れば、馬太傳、馬可傳、路加傳の三福音書は耶蘇紀元後第二世紀の始めに出來たもので、約翰傳は第二世紀の半ば頃に出來たものと極つて居る、左すれば早いものは、耶蘇の死してから漸く百年位後に出來て居るものだけに、耶蘇の何日に生れたか、何月生れたかも書いてなく、又四季中の何の時候に生れたかも書いてない、七十人も多くの弟子が居たのに、彼の如く多くの人が歸依して居る有り難い神様の

事を、何んだか漠然と幽靈の如くに書いてある、併しこれも無理からぬ次第で、私生兒を何れの國だとても、大びらに誕生致候と吹聴が出来る筈のものでないから、秘密にして舍いたので、自然日も月も知れなくなつたのだらう、だが是非とも、四福音書は神の默示に依て書かれたものとすれば、神様は事が多いから御忘れになつたのかも知れない、幾くらく全智全能の神様でも、時には御忘れになることが矢張あると見ゆる、(福音書に於ては) 御忘れなることが幾くある。

第四 四福音書の略評、矛盾、剽窃、

詐偽、捏造

耶蘇といふ男は、何んな者であつたかといふことを研究する爲め、先づ耶蘇教徒の經文として居る四福音書から始めや

う、
四福音書とは、馬太傳、馬可傳、路加傳、約翰傳である、この傳にあるのは、耶蘇の弟子馬太、路加などが、後人へ傳へた通り書いたといふ義である、其事は、希臘語の出来る人は、メタ(metha)と書いてあるので分る、決して馬太、路加などが直接書いたものでない、夫れを *Evangelium Matthaei* をごと馬太等が直筆をもつて書いたやうに書いて、あるものもあれば、又其通り説いて居る宣教師も、そう思つて居る信者もある、知らずして思つて居るなら無學の至りである、若し知つてそういふ風に説くなら詐偽の罪は免れない、シテ其四福音書の出来たのは、大抵耶蘇が死んでから、百年乃至百五十年位の間であることは前にも述べた通りである。

其一 耶蘇の生年月の捏造なること、
不明なること、

耶蘇の生れた年を羅馬の建都七百五十四年と定めて、西洋年歴の紀元としたのは六世紀の僧テオニシウス・エグジグウスといふ者である、左れども之れは昔から随分異議のある事で、耶蘇教派の中でもベチサクト派の者は、羅馬の建都より七百四十七年の十二月二十五日に定めて居る、ルナン等は建都後七百五十年頃だと云つて居る、何んでも此通り色々の説があつて、只今では、數十通り程の説があるさうだ、斯う色々の説があるのは、ごういふ譯であるか、先づ神の默示に依て書かれたと云ふ、彼の狐狗狸さんと御親類の四福音書を調べて見ると

天下の戸籍を査ふる詔命カイザル、アウグストより出でたり、この戸籍調査はクレニオがスリヤを管理せし時の初次に行はれたりし也、人みな戸籍に登のぼるとして、各その故邑に歸たり、ヨセフもダビデの家族また血統なれば、戸籍に登かんとて已に孕める其聘定の妻マリヤと共にガリラヤの邑ナザレより出でユダヤに上りダビデの邑ベツレヘムごいふ所に至れり、此に居て産期満ければ家子を生ば、それを布に裏て、槽に臥せたり、(路加傳第二章自第一節至第七節)

イエスはヘロデの時ユダヤのベツレヘムに生れ給ふ

(馬太傳第二章第一節)

路加傳第一章を見るにユダヤの王ヘロデの時ザガリヤの

妻エリサベツ子を孕みて、第六ヶ月目にしてマリヤ耶蘇を孕むと書いてある此等で結論するに、猶太の王ヘロデの代にクレニオがスリヤを管理して居た、其時天下の戸籍調査があつて、其調査に應ずる爲め、ヨセフが女房を伴れて旅行した途中で生れたといふのである、併しヘロデの死してアケラオ位を襲たか程なく其位を奪はれた、即ちヘロデの死して十年を経て後に、始めてクレニオ、スリヤに来てスリヤとユダヤとを合して戸籍を調査した事は歴史上疑もなき事實であるから、戸籍調査の頃生れたものとすればヘロデの時代でなくなり、又假りにヘロデの時代に戸籍調査があつたとすれば、其頃はクレニオが未だスリヤへ来て居ないのみならずヘロデの頃は猶太は未だ羅馬の州でプロビンチヤない、其子

アケラオの時に至て始めて州となつたものである、羅馬は己れの州でない、諸王國は假令貢租を納むる者でも、決して戸籍を調べた事はない、だから馬加傳と路加傳との衝突は云ふまでもない、路加其者にも前後少なくとも十二年以上の算用違ひがある。

又馬太傳第二章に、「耶蘇の生まるゝ時、博士東方より來りて猶太人の王として生れ給へるものは何處に在すや、我曹東方より其星を見たれば、彼れを拜せん爲めに來れりといひ、ベツレヘムなるを聞き、其方へ來る前に東方にて見たりし星、彼等に先ちて耶蘇の居處の上に止まれり」とある、此星の事につきて種々の奇怪な説を唱へて、人を欺き自からを欺く者が居る、星宿の變異に依り邦家の運命を卜し、賢哲の

死生を知るなど云ふことは、天文學の開けなかつた昔の人ならイザ知らず、開明の今日に何の星の躔度は猶太の分野に該當^{かた}るから、東方より博士の猶太へ尋ねて來たのは、決して虚誕架空の説でないなど云ふのは、全く痴漢の言である、第一能く考へて見るが善ひ、其博士達は文盲時代の人だから、星に依て世の中の事が知れると云ふ迷信を有して居たにもしろ、猶太人の王が生れるのは猶太人なら格別、外國人には何等の關係も無いのに、星が態々東方から其博士の前に立つて來て、耶蘇の居る家の前に止まつたなど、は、奇怪千萬な話だ、何の世に星がそんな運行をしたとがある。

又た此の星が東方から博士等の前に立ち、耶蘇の居る家の前に止まる位なら、博士等直にベツレヘムへ行けば善い譯

で、決してエルザレムに立ち寄つて尋ぬる要が無い、此の不必要な立ち寄りをした許りに、ベツレヘムと其境内の二歳以下の嬰兒が残らず殺された(馬太傳第二章第十六節)是れが神の奇蹟に由りて現はれた星とすれば、耶蘇は残忍猛惡なると豺狼にも過ぎた神である。

又其尋ねて來たといふ家は何處であるか、常に繪に書いてあるやうに、ベツレヘムの旅舎であらうか、併し四十日經つと其旅舎を出てエルザレムへ行つたと路加傳第二章第十二節に書いてある、ジテ見るごベツレヘムに居る間に波斯かカルデヤから來るのには、星が出てから直ぐ來たとしても中々足の速い男だ、殆ど早打ちの飛脚も三舎を避くる程である、而已ならず……何れ後に述べるが……耶蘇は實

際ベツレヘムで生れたものでない、

加之ならず耶蘇教徒が耶蘇の生れた頃、天に新たな星が現れた事の有無につきて、有力な證據として居るのは、唯ケプレルの臆測のみで、其臆測といふのは、一千六百四年に土星木星火星の三星の會合があつた、其年に又別に、天に一種異体な星が現れた事がある、其れに由てケプレルは、羅馬の建都七百四十八年にも、土星木星火星の三星が會つた事があると、いふ推算をして、其年に千六百四年に出たと同じき星が現出したかも知れぬと臆測したのである、出たといふことは、どうしても斷定を下すべき理由がないので、ケプレル自身も決して斷定はしない、唯だ單に出たかも知れぬと言つたのである、而已ならず星の二つ若しくは三つ會合する



△ 同の事柄を論ずるに、本同の事柄を論ずるに、

とは、何にも珍らしき事ではない、千年に一度二千年に一度あるなごいふ珍奇な事柄ではない、又た土星木星火星の三つが會合する時、必ず新星の出るといふ理由もない。

又近來(一千八百八十五年)有名なる天文学者マイエルの著書の中に『耶蘇の生れた時、天に現れたといふ星は、聖書の外は何の歴史にも出て居ない、而已ならず其の聖書に書いてある星のことが、甚だ曖昧であるから、我等は天文学上其點につきては、何にも慥かなことを云ふことが出来ぬ』とあるケプレルは、かもしれぬと言つて居るが、今假りに實際新星が出たとしても、是れは羅馬の建都七百四十八年の事だから、耶蘇紀元前二年である、左すれば四福音書と違ふのは勿論、ルナンの説ともベチサクト派の説ともエクシグウスの説

とも合はない。

又耶蘇の生れた日は四福音書の中には何處にも書いてない、十二月二十四日の夜と定めたのは、耶蘇教以外の宗派に冬至の祭があつたのに附會したものである、彼のクリスマストリーなども、皆な昔の異教の残りであると云ふことは、西洋の學者に殆ど異論はない。

其二 四福音書の剽窃、耶蘇教徒と強盜と

茲にタルムードといふ書がある、是れは猶太教の種々の訓戒禮式などを書き集めたものである、全部ミシナーとゲマラーとの二篇より成つて居る、ミシナーは本文で、ゲマラーの方は註釋である、此タルムードに書いてある事は、猶

太人が古くより口傳にして居たものを、二世紀の中頃に猶太教の學者で聖人と號せられたるユダが集めたものである、此タルムードにある語と、四福音に耶蘇の教訓と定められてある語とを、比較して見るに面白い、先づ馬太傳第六章第九節より第十三節に

爾曹かく祈るべし、天に在ます、我儕の父よ、願くは爾名を尊崇させ給へ、爾國を臨らせ給へ、爾旨の天に成るごとく地にも成させ給へ、我儕の日用の糧を今日も與へたまへ、我儕に罪を犯す者を我がゆるす如く、我儕の罪をも免したまへ、我儕を試探に遇せず、惡より拯出し給へ、國と權と榮は、爾の窮りなく有ちたまふ所なり、アーメン、

又路加傳第十一章第二節より第四節に

イエス曰ひけるは祈る時は斯くいふべし、天に在す我儕の父よ、願くは聖

名を尊崇させ給へ、爾國を臨らせ給へ、爾旨の天に成るごとく地にも成させ給へ、我儕の日用の糧を毎日に與へたまへ、我儕に罪を犯す者を凡て免せば、我儕の罪をも免し給へ、我儕を試探に遇せず、惡より拯出し給へ、

是れは主の祈りとして耶蘇教では至極大切なもので、日曜日になれば、教會堂では必ず唱へるものだが、實はタルムードの中のカチツシと云ふ祈禱文を、そつくり其儘竊んだものである、其の祈禱文は次の如くである

天に在す我儕の父よ、我儕を恵み給へ、主なる我儕の神よ、御名を尊崇させ給へ、天にも地にも御名を尊崇させたまへ、御國を今も後も窮りなく我儕の上に在らしめ給へ、古の賢き人々の教へたまへるには、我儕に罪を犯すものを免せと教へ給へり、我儕を試探に遇せず、惡より拯出し給へ、國と榮は爾の窮りなく有ち給ふべきところなり、

馬太傳第五章第二十八節に

凡そ婦女を見て色情を起す者は、中心すでに姦淫したるなり

タルムードに曰く

人の妻を見て色情を起す者は、姦淫したるに同じ

馬太傳第七章第十二節に

凡て人に爲られんと欲ふことは、爾曹また人にも其ごとく爲よ、是れ律法と預言者なるなり、

タルムードに曰く

凡て人に爲られざらんと欲ふことは、爾曹また人にも其ごとく爲され、是れ律法の基いなり

馬太傳第七章第一節より第三節に

人の罪を定むること勿れ、恐らくは爾曹も亦罪に定められん、爾曹が人の

罪を定むる如く、己が罪をも定めらるべし。爾曹が人を量ることく、己れも量らるべし。なんぢ兄弟の目にある物屑を視て、己が目にある梁木を知らざるは何ぞや。己れの目に梁木のあるに、如何で兄弟に對ひて、爾が目にある物屑を我に取らせよと曰ふことを得んや。

タルムードに曰く

爾自から彼れと同じき境遇に逢はずば、爾の隣りの罪を定むること勿れ、

……我儕が人を量る秤を以て、我儕も亦量らるべし。

我が目より物屑を取らんとする前に、先づ爾の目より梁木を取れ、

馬太傳第七章第廿四節より第廿七節に

凡て我がこの言を聽きて行ふ者を、磐の上に家を建てたる智人に譬へん、雨ふり大水いで風ふきて、其家を撞てども倒る、ことなし、是れ磐を基礎と爲したればなり、凡て我がこの言を聽きて行はざる者を、沙の上に家を

建てたる愚なる人に譬へん、雨ふり大水いで風ふきて、其家を撞てば、終には倒れてその傾覆大なり、

タルムードに曰く

凡て法律を學びて之れを行ふ者は、煉瓦を以て磐の上に家を建てたる人の如し、雨ふり風ふきて大水いづれども、其家倒る、ことなし、凡て法律を學べども之れを行はざる者は、煉瓦の上に磐の家を建てたる人の如し、雨ふり大水出で、其家を洗ひ倒さん、

馬太傳第五章第四十二節より第四十八節に

爾の隣を愛くしみて、其敵を憐むべしと言へることは、爾曹が聞きし所なり、然れども我れなんぢらに告げん、爾曹の敵を愛くしみて、爾曹を誣ふ者を祝し、爾曹を憎む者を善視し、虐遇迫害せるもの、爲めに祈禱せよ、此くの如くするは天に在ます爾曹の父の子とならん爲めなり、夫れ天の父は其

日を善者にも悪者にも照し、雨を義しき者にも義しからざる者にも降らせ給へり、爾曹己れを愛する者を愛するは、何の報賞かあらん、………是の故に天に在す爾曹の父の完全きが如く、爾曹も完全くすべし、

馬太傳第二十五章第三十五節第三十六節に

蓋はなんぢら我が飢ゑし時、われに食はせ、渴きしとき我に飲ませ、旅せし時、われを宿らせ、裸なりし時、われに衣せ、病みし時、我をみまひ、獄に在しとき、我れに就たればなり、

タルムードに曰く

神の恵み深きごとく、爾曹も恵み深かるべし、

神の萬物に對して爲し給ふごとく、爾曹もなすべし、

裸なる者に衣せ、病める者を癒し、悲しめる者を慰め、なんぢの父なる神の子等に對して、兄弟の如くせよ、

馬太傳第十九章第十九節に

己れの如く爾の隣りを愛すべし、

馬太傳第二十二章第三十九節第四十節に

己れの如く爾の隣りを愛すべし、凡ての律法と豫言者とは此の二誡に因れり

タルムードに曰く

己れの如く爾の隣りを愛すべし、是れ律法の第一なり、

斯くの如く比較して見ると、耶蘇の教へたことはタルムードより取つたことが多い、言ひ換ゆれば耶蘇は多く猶太教の訓戒を盗み取て人に教へたのだと云ふことになる、そこでタルムードの出版さるゝと耶蘇教の徒輩は大騒ぎをして、先づ第一にタルムードの方が寧ろ耶蘇教を竊んだもの

と主張して見たが、頭刳其主張は効がない、何故なれば猶太教のものは、耶蘇を詐偽者で、大山師で、瀆神者であると堅く信じて居る、耶蘇といへば罵詈謗を極めて居る、その忌はしき耶蘇教から取つて、己れの經典中に入る、筈がない、そこで今度は其手段を變へて、得意の暴力に訴へることにした、即ちタルムードの出版者を生きながら焚殺し、或は國外に放逐し、書籍は集めて焼き棄てることにした、夫れも一度や二度や、十度や廿度でない、數百度であつた、十六世紀の末の如きは、五十年も経ぬ間に六十回もやつた、恰も強盜が人を殺し財を掠めた後ち、證據を湮滅せしむる爲めに、火を放つて家を焼くと、同じ仕方である。

其三 預言。耶蘇の爲したる預言。

耶蘇につきたる預言、合ふ

も預言合はぬも預言

耶蘇教徒は、耶蘇は神である、太古より神が約束して降し給へる救世主で、耶蘇一代の事蹟が預言に應つて居るとは勿論、耶蘇自身の爲したる預言も、悉く事實となつて、後に一々驗しがあつたと主張するが、果して其通りであるか、大に考究すべき問題である。

先づ耶蘇の爲したる預言の中に、三日三夜地の中に葬むらるべしとあるが、

それヨナが三日三夜魚の腹の中に在りし如く、人の子も三日三夜地の中に在るべし(馬太傳第十二章第四十節)

福音書によると、其實三日でなくて、一日半も経たぬ中に甦

つて、墓に居なかつたこと書いてある、十字架に懸つたが、晝の三時頃には未だ生きて居たが(馬太傳第二十七章第四十六節、馬可傳第十五章第三十四節)其日は備節日で安息日の前である(馬可傳第十五章第四十三節)安息日を経て翌朝、日出るか出ない、未だ薄暗らき間に婦人達が尋ねて來たら、最早墓に居なかつたと書いてある(馬太傳第二十八章、馬可傳第十六章、路加傳第二十四章、約翰傳第二十章)シテ見る、一日半位しか経たない、三日三夜といふ預言は當らなかつた譯だ、而已ならず其甦つてから逢つた人々は、婦人か左もなくば愚かな人間ばかりだ、祭司の長パリサイ宗の人等は殊更之れが爲めにピラトの所に行き、願つて守兵を置いた位だから(馬太傳第二十七章自六十二節至六十六節)彼等に逢

てこそ、眞に己れの爲した預言の甲斐もあるのに、密かに内證でマリヤなど云ふ婦人共ばかりに顯はれて、偶まには弟子等の男に顯はれても、信ぜぬ者も其中には在つたなど云ふに至ては、愈々不思議で、態々天の使を雇ひ、墓の前にあつた大きな石を、汗流して轉ろばさせる必要もないのである。第二の預言は、神の國が此世に建つて、耶蘇が自から王と爲つて、賞罰を爲すと云ふのである、而かも弟子等の未だ生きて居る間に來ると云ふ約束だ、馬太傳第十六章第二十七節及び第二十八節に

それ人の子は父の榮光を以てその使等と偕に來らむ、其時各々の行に由て報ゆべし、誠に爾曹に告げん、人の子その國を以て來るを見るまでは、此に立つもの、中に死ざる者あるべし、

馬可傳第九章第一節に

イエスマた彼等に曰けるは、我れまことに爾曹に告げん、此に立つもの、
中に、神の國の權威をもて來るを見るまでは死ざる者あり、

路加傳第九章第二十七節に

われ誠に爾曹に告げん、此に立つ者の中に、神の國を見るまでは死ざる者
あり、

又馬可傳第十三章第二十六節及び第三十節に

其とき人々は人の子の大いなる權威と榮光を以て雲の中に現れ來るを
見ん……われ誠に爾曹に告げん、是等の事ごとく成るまでは、此民
は逝ざるべし、

馬太傳第十章廿三節以下に

この邑にて人なんぢらを責めなば、他の邑に逃れよ、我れまことに爾曹に

告げん、爾曹イスラエルの諸邑を廻盡さむる間に人の子は來るべし

馬太傳第二十四章第三十節及び第三十四節に

其時人の子の兆天に現はる、また地上にある諸族は哭き哀み、且人の子の
權威と大いなる榮光をもて天の雲に乗來たるを見ん、われ誠に爾曹に告
げん、此等の事ごとく成るまで、此民は廢せざるべし、

路加傳第二十一章第三十二節に

誠に我れなんぢらに告ん、此事みな成るまでは、此世は逝つざるべし、この世
の字は甚だ曖昧である、實は希臘の原文に Genos とあるから、代の義で世
の義ではない、翻譯した人等は氣が附かないでしたのかしらぬ、不注意な
話である、若し知つて居て慥たく斯うしたとすれば、狡猾千萬な次第である、
併し狡猾手段位は耶蘇教僧侶の普通のとて畢竟怪むにも足らぬが、

シテ其キリストの此國に來るとききの有様と云つたら、實に

大層なものだ、馬太傳第二十四章第二十九節より第三十一節に

此等の日の患難の後、たゞちに日は晦く月は光を失ひ、星は空よりおち、天の勢ひ震ふべし、其とき人の子の兆天に現はる、また地上にある諸族は哭き哀み、且人の子の權威と大なる榮光をもて、天の雲に乗來るを見ん、又その使等を遣し、^{ちやうど}籥の大なる聲を出さしめて、天の此極より彼の極まで、四方より其選れし者を集むべし、

又馬可傳第十三章第二十四節より第二十七節に

厥時この患難の、ち日は暗く月は光を失ひ、天の星はおち、天の勢ひ震ふべし、人々は人の子の大なる權威と榮光とをもて、雲の中に現れ來るを見ん、また其とき人の子その使者等を遣して、地の極より天の極まで、四方より其選れし者を集むべし、

キリストの言はるべき事、
キリストの言はるべき事、
キリストの言はるべき事、
キリストの言はるべき事、

耶蘇の當代は愚ろか、一千九百年も経つた今日まで、此預言が少しも事實になつて現はれない、シテ見ると預言も八卦の一種で、合ふも預言、合はぬも預言といふものか、近來救世軍と云ふ奴等が、太鼓を敲いたり、笛を吹いたりして、沙煙を立て、諸方を廻り歩くが、あれが義人を集むる爲め、籥を吹く天の使であるかも知れぬ、すると雲に乗て來る耶蘇は、抑も誰れであらうか、時々天に閃光を放つてごろく、いふものがあるが、あれが耶蘇であるのだらうか、それとも亦宣教師の吹く馱法螺が、天の使の籥か、しれぬ、誠に抱腹絶倒の次第である、

斯くの如く耶蘇の爲した預言は一つも當つて居ない、耶蘇について舊約書に種々様々の預言がある、其預言にかなつ

て居るから、神から約束せられた救世主であると云ふのは、四福音書を始め耶蘇教徒の極めて大切なる箇條として確く信憑して居る所である。だが此大切な預言が亦た一つも中つて居ないのである。

第一、馬太傳第一章第二十節以下に

斯くて此事を思念せる時に、主の使者かれが夢に現はれて曰けるは、ダビデの裔ヨセフよ、爾の妻マリヤを娶ることを懼る、勿れ、その孕める所の者は、聖靈に由るなり、かれ子を生まん、其名をイエスと名くべし、蓋その民を罪より救はんとすればなり、凡て此事は、預言者に託て主の曰ひたまひし言に、處女はらみて子を生まん、其名をインマヌエルと稱べしと有るに應せん爲めたり、其名を譯けば、神われらと偕に在るとの義なり、

此文句の有るは舊約書以賽亞書第七章第十四節であるが、

其第七章の文を見れば、耶蘇キリストの事を預言したのでないことは直ぐ分かる、其章の大體の話は次の如くである、ユダヤ王アハズの時、アラムの王レチントとイスラエルの王ペカとが、ユダヤを攻め取らんご謀つた時に、預言者イザヤがアハズに向つて言つた言葉である、且つ其本文は處女にあらずして若き妻の意である、而かもイザヤの妻の事である、而已ならず其子の未だ善悪を知らぬ間に、彼のレチン及びペカの二人とも亡びると書いてある。

第二の預言は米迦書第五章第二節に

ベツレヘム、エフラタ………イスラエルの君となすもの、汝の中より我が爲めに出べし、

とあるが、此預言の事は何れ後章に委しく述ぶるであらう、

次に

第三の預言はヘロデ耶蘇を殺さんさせし爲め、逃げて埃及へ去つて、ヘロデの死ぬるまで其處に止まつた、これ神の其子を埃及より呼び出せりと預言したまへるに應ふと云ふのである(馬太傳第二章第十五節)成程これは何西阿書第十章第一節にあるが、それは

イスラエルの幼かりしとき、我れこれを愛しぬ、我れわが子をエジプトより呼びいだしたり、

とあつて、モーセがイスラエル人を引き伴れて、埃及からカナンへ來たといふ過去の事を陳べたので、未來の事を預言したのではない、

第四の預言は耶蘇の生れた時にヘロデ前のメカの預言が

ある爲め、イスラエルの君となる者が生れたといふことを聞きて、ベツレヘムと其境域内に於ける二歳以下の嬰兒を盡く殺せりとある、

即ち預言者エレミヤの言に歎き悲み、甚しく憂ふ聲ラマに聞こゆ、デケル

その兒子を歎き其兒子の無きにより慰めを得ずと云ひしに應へり(馬太

傳第二章第十六節より第十八節)

ヘロデは耶蘇紀元の四年前に死して居るのは歴史上確しかな事實である、其ヘロデが兒子を殺させたこと云ふも不思議だ、ヘロデの幽霊が出て來たのか、それともヘロデは耶蘇のやうに死してから甦つたものか、又エレミヤの預言は耶利米亞記第三十一章第十五節にあるが、其章を能く讀んで見ると兒子を殺された爲めに歎き悲んだものではない、ラ

ケルの兒子が敵の爲めに捕虜となりなごして他國にある者を悲みて泣いたものである、依て神様が彼等は程なく國に歸り來るべしと慰めたのである、耶蘇の出生とは何の關係もない話である。

第五の預言は、耶蘇がベツレヘムに生れたがナザレと云ふ村に居た故に、彼はナザレ人と稱られんとある預言に應ふと云ふのである(馬太傳第二章廿三節)、此預言は士師記第十三章第五節に見えて居るが、夫れも耶蘇とは全く無關係の話で、ゾラ人のマリアと云ふ人の妻は(士師記第十三章第二節以下)

石婦にして子を生みしことなしエホバの使その女に現れて之れにいひけるは、汝は石婦にして子を生みしことあらず、然れど汝孕みて子をうま

ん、されば汝つゝ、しみて葡萄酒および濃き酒を飲むことなかれ、またすべて穢れたるものを食ふなかれ、視よ汝孕みて子を産まん、其の頭には剃刀をあつべからず、その兒は胎を出るよりして神のナザレ人(神に身を献げし者)たるべし、彼れベリシテ人の手よりイスラエルを拯ひ始めんと、その婦人來りて夫に告て曰けるは、神の人我にのぞめり、その容貌は神の使の容貌のごとくにして甚おそろしかりしが、我れ其のいづれより來れるやを問はず、彼また其名を我に告ざりき、彼れ我にいひけるは、視よ汝孕みて子を産まん、然れば葡萄酒および濃き酒を飲むなかれ、またすべてけがれたるものを食ふなかれ、その兒は胎を出るより其死する日まで神のナザレ人たるべしと

同章第廿四節に其婦人子を産みて其名をサムソンと呼べ
ることを書けり。

左れば此預言は、サムソンの生るゝについての預言で、耶蘇についての預言でない、ナザレ人といへるも、ナザレと云ふ村より出た稱號ではなく、正しくはナヅヲ人若しくはナシヲ人と云ふべきで、神に身を献げし者の意であるとは、原文に割註をしてある通りである、元來ナザレといふ村は、舊約書に一箇處もない。

第六の預言は耶蘇故郷のナザレを去り、ゼブルンとナフタリとの界なる海邊のカペナウンに至りて此に居れりと云ふ所に(馬太傳第四章第十四節より第十六節)

これ預言者イザヤの言に、ゼブルンの地、ナフタリの地、海に沿ひたる地ヨルダンの外の地、異邦人のガリラヤ、此等の幽暗に在る民は大なる光を見、死の地死の蔭に座する者の上に、光いでたりと云ひしに應はせん爲なり

このイザヤの語が預言するや否やは多言を要せず、本文を見れば一目瞭然である。

今くるしみを受けども、後には闇なるべし、昔しはゼブルンの地、ナフタリの地を、あなごられしめ給ひしかど、後には海に沿ひたる地、ヨルダンの外の地、ことくに人のガリラヤに榮を受けしめ給へり、幽暗をあゆめる民は大なる光をみ、死蔭の地にすめる者の上に光てらせり云々(以賽亞第九章第一節以下)

第七の預言は、馬太傳第八章第十七節に、耶蘇が色々の病氣を癒したのは、イザヤの

自から我儕の恙を受け、われらの病を負ふ

と預言したるに應ふと云ふのであるが、併し其文句の出で居る以賽亞書第五十三節を調べて見ると、彼れと云ふのは

神の教を信じて居る人を指して言ふたので、イザヤの言葉は未來にくる耶蘇を指して言ふたのではない。

第八の預言は、耶蘇が病氣のある者を癒やして、且つ之れに他人に告ぐるなかれと誡めたのが、預言者イザヤの言に

視よ我が選びし我が僕即ち我が心に適ひたる我が愛しむ者われ之に我が靈を賦へん彼れ異邦人に審判を示すべし彼れは競ふことなく喧ぶことなし、人街に於て其聲を聞くとなし、審判をして勝とげしむるまでは、傷める葦を折ることなく、煙れる麻を熄すことなし、異邦人も亦その名に頼るべし。

とあるに應ふこと云ふのである(馬太傳第十二章第十七節より第二十節)、これと此文句のある以賽亞書第四十二章の前後を見れば、耶蘇の事でないことは直ぐ分る、即ち耶蘇は神

の子と云ふのだから、神の僕だの選んだものなご云ふ筈がない。

第九の預言は、耶蘇の種々譬喩を設けて説教したのは、舊約の詩篇の第七十八章第二節に

われ口を啓きて譬喩を設け、いにしへの玄幽なる語をかたりいでん、

とあるに應はせんが爲めなりと(馬太傳第十三章第三十五節)書いてあるが、此詩篇第七十八章と云ふのは、アサフが人を教へん爲めに作つたもので、自ら譬喩を設けたる譯を篇首に斷つたのである、我といふのはアサフ自身の事で、神の事でもなければ、耶蘇の事でもない。

第十の預言は、耶蘇エルサレムへ入る時驢馬に乗て居たのは、撒加利亞の言葉に應じたこと云ふのであるが、本文とは少

しく違つて居る、それは馬太傳第二十一章第一節より第七節に

かれら橄欖山のベツバゲに至りエルサレムに近ける時、イエス二人の弟子を遣さんとして、彼等に曰けるは、爾曹むかふの村に往け、やがて繋ぎたる驢馬の其子と偕にあるに遇ん、夫を解きて我に牽きたれ、若しなんぢらに何とか言ふものあらば、主の用なりと曰へ、さらば直に之を遣すべし、預言者の言に視よ、爾の王は柔和にして、驢馬すなはち驢馬の子に乗り、なんぢに来るとシランの女に告よと云へるに、應せん爲に如此なせる也、弟子ゆきてイエスの命せし如くなし、驢馬と其子を牽きたり、己の衣をその上に置ければ、イエスこれに乘れり

とあれども、第一撒加利亞書第九章第九節には、唯シオンの女よ大に喜べとあつてシオンの女に告よとは云ふてない、

第二には其驢馬が一匹でなければならぬのに、馬太傳によれば二匹である、而かも其二匹ともに弟子等其上に己等の衣を置きたれば、イエスこれに乗ると書いてある、二匹の驢馬に同時に乗るは、如何にして出來得るであらうか、遠き處ならば乗り換へる爲めといふともあるが、エルサレムに近づきたる時とあれば、其の用がない筈である。

又馬可傳第十一章第一節以下に

かれら橄欖山のベツバゲとベタニヤに至り、エルサレムに近づける時、イエス二人の弟子を遣さんとして、彼等に曰けるは、爾曹對面の村に往け、かしこに入らば、頓て人の未だ乗ざる所の繋げる驢馬の子を見るべし、其を解て牽來れ、もし誰か爾曹に何ゆゑ然する乎といふ者あらば、主の用なりと曰へ、さらば直に其を此に遣るべし、彼等ゆきて門の外の岐路に繋げる

驢馬の子を見て之を解きければ、其處に立てる人々のうち、或人かれらに曰けるは、此驢馬の子を解きて何如する乎、弟子イエスの命せし如く曰しかば、遂に許したり、弟子驢馬の子をイエスに牽き來たりて己が衣を其上に置ければ、イエスこれに乘れり、

路加傳第十九章第二十九節より第三十六節に

橄欖と名くる山に靠るベツバゲとダベニヤに近づきける時、その弟子二人を遣さんとして曰けるは、對面の村にゆけ、彼處に入らば、人の未だ乘らざる所の繋ぎたる驢駒ろこに遇ふべし、其を解きて牽來れ、もし誰か爾曹に何ゆゑ解くやと問ふ者あらば、如此こたふべし、主の用也、遣されたる者往ければ、果して其語りたまへる如く遇ひぬ、かれら驢駒を解くとき、其主等かれらに何ぞ驢駒を解くやと曰しかば、答て主の用なりと曰ひて、之をイエスに牽來り、己が衣を驢駒に置き、イエスを其上に乗す、イエス往きけるとき

衆人その衣を路上に布けり、

約翰傳第十二章第十四節より第十六節に

イエス驢馬の子を得て之に乗る、録してシオンシオンの女よ、懼る、勿れ、視よ、爾の王は驢馬の子に乗て來るとあるか、如し、弟子たち初は此事を曉ざりしが、イエス衆を受けし後に、彼等此事の彼について録され、且その事を人々彼に行ひたりしを憶起せり、

最初は一匹にしてあつたが、後に氣が附いたから、二匹は可笑しいとて改めたものに疑ひなひ。

第十一の預言は、耶蘇を捕ふる時に、逮捕吏ていぶに劔と棒とを持たせて、盜賊を捕縛するが如くにして來りたるは、皆を預言等の録せる所に應ふこ、馬太傳第二十六章第五十六節にあるが、そんな預言は何處にあるか、常には預言者の文句を其

儘引照するのに、此處にはないのは是れ全く胡魔化してある、若しあるならば掲げて見るがよい。

第十二の預言は、ユダが耶蘇を售つたのを後悔して、其金を返したら、それで陶工の田を買ふたのは、馬太傳第二十七章第九節に

預言者エレミヤに託り、いはれたる言に、イスラエルの民に估られ、估られし者の價の銀三十を取り、主の我に命せし如く陶工の田を買ぬと有に應へり

と書いてあるが、エレミヤにそんな預言はない、ザカリヤの言ふたに此文句がある、撒加利亞書第十一節第十二節及第十三節を見れば分る、それも耶蘇の話ではない、即ちザカリヤが神の命により人を牧する者となつたが、人民兎角に

己れの教に従はないから、怒つて、其の職を止めた、其時人民が銀三十を與へたのを、神の命によりてエホバの宅に投げ入れたといふ事柄で、耶蘇に就ての預言でも何んでもない。第十三の預言は、耶蘇を十字架に附する時、羅馬の兵卒等圍を拈て其衣を分けた、是れが預言者の言に應ふて居るとあるが、馬太傳第二十七章第三十五節に

斯てイエスを十字架に釘けし、ち圍を拈て其衣を分つ、これ預言者の言に彼等互に我が衣を分け、わが裏衣を圍にすと云ひしに應へり、

併し此の刑死人の衣類を、執行者の所有に歸せしむること、は、羅馬の法律で何にも特に耶蘇を死刑に處した時に限つた次第でも何んでもない、耶蘇の時に限りて特異な事柄のありてこそ、預言の甲斐もあるが、誰れでも刑死人の時は必

ずある事とすれば、預言は誰れにでも適用が出来る、耶蘇と一所に十字架に釘けられた盜賊共にも適用が出来る、詰まり無益の預言である、夫れに此の預言のある詩篇第二十二篇を見れば、其の耶蘇に就ての預言でないことは明である、此の篇はダビデが己れ神にすてられ、助を得ざるが故に、其の力弱くなり、敵人の奪掠を防ぐ能はざるを歎じたる詩である、故に詩篇の題にも「あけぼの、鹿の調にあはせて伶長にうたはしめたるダビデの歌」とある、斯く耶蘇自からの爲した預言は、一つも事實となつて現れぬのみならず、耶蘇について爲されて居ると云ふ預言も、皆な一つも預言ではない、おまけに人の名がイザヤとザカリヤと違つて居るなどは、ごうい譯であらうか、是れでも神の默示に依て書いた

ものとすれば、神は嘘つきの妖怪者で、非常な健忘性であると言はなければならぬ。

第五 耶蘇傳は釋迦傳より剽窃したる

ものなりとの説

ルウドルフ・ザイデルといふ人「耶蘇の福音書と釋迦傳説及教理との關係」(一千八百八十二年ライプツッヒ出版)、「釋迦傳説と耶蘇傳説」(一千八百八十四年ライプツッヒ出版)の二冊の書を著して、釋迦傳と耶蘇傳と甚だ類似して居る點を述べて、耶蘇傳は釋迦傳から竊み取たものと結論して居る。

耶蘇の傳を四福音書に依て述べれば、先づ大体は次の如くである、ダビデの後裔(馬太傳第一章初節、路加傳第三章二十

節より三十七節まで)ヨセフを假りの父として、猶太のベツレヘム(馬太傳第二章初節、路加傳第二章五節)と云ふ古より有名なる所に生れた、其の胎中にある時種々の奇瑞があつて(馬太傳第一章二十五節、路加傳第一章三十九節より五十六節まで)其生るゝ時に博士、星に導かれて東方より來て(馬太傳第二章一節より十六節まで)種々の禮物を齎らした、潔めの時(生れて八日目の時)シメオンと稱する義人、及びアンナと稱する預言者が(路加傳第二章二十五節より三十九節まで)彼れを見て直ちに救世主なるを知つた、斯くて耶蘇成長するに隨て益々智慧、路加傳第二章五十二節)發達して、十二歳の時(路加傳第二章四十二節より四十六節まで)兩親に隨ひ、トイ逾越の節筵いに、エルサレムに行つたが、節筵の日終へ

て、皆々家に歸つた所が、耶蘇は居をい、兩親は驚いて、諸方を搜して、終に再度エルサレムに行て見たら(路加傳第二章四十一節より五十節まで)祭殿の内に教師等と一所になつて問答をして居た、之れが兩親と別れてから三日の後ちである、と云ふ事である、釋迦傳の方では、釋迦は王族で、佛が人間の胎を假りて生れ、其生るゝときに種々の奇瑞があつて(神童遊戯經)神童遊戯經には、支那譯の外に西藏譯もあつて、少しは違つて居るが、今は總稱したのである(諸國の王達や、神佛が禮拜して(神童遊戯經)物を奉つた、老人のバラモンが釋迦を一見して(神童遊戯經)人間を諸惡より救ひ給ふ佛と知つた、又た其生れたのも古より有名なカピラバストである、釋迦も十二歳の時に、何れに行つたか、行方が知れぬので、兩

親が心配して捜して見たら、寺に行つて僧侶の中に居た、神童遊戯經小兒の時から伶俐で、年の増すに随つて益々智慧が増したと書いてある(神童遊戯經)

さて耶蘇は其後三十歳頃になつてから、ヨルダンの河にてバプテスマのヨハネから洗禮を受け(馬太傳第三章十三節以下及び馬可傳第一章九節路加傳第三章廿一節)聖靈に導かれて野に行き四十日間悪魔に試みられたが(馬太傳第四章一節より十一節まで、馬可傳第一章十二節十三節、路加傳第四節一節より十一節まで)終に諸方に傳導し始めて、先づアンデレ、ピリポ、シモン等の弟子を得、次に無果菓樹の下に居たナダナエルをも從へ(約翰傳第一章四十六節以下)漸々弟子が増して、上座が十二人、次席七十人であつた(馬太傳第

四章十八節以下、路加傳第十章初節、馬太傳第十章初節)釋迦も山に入つて斷食をして悪魔に試みられた後に聖河にて身を潔め(神童遊戯經)やがて諸方を巡つて法を説いたが、其弟子の數も、長老十二人、次班が八十人であつた、不思議な事には此十二人の弟子の中、釋迦の最も愛した者が三人、釋迦に背いたものが一人(ダイバダッタ)居たが(神童遊戯經)耶蘇の十二人の弟子の中にも、矢張り其通りである(馬太傳第十章四節及び第十七章初節)又釋迦が始めて人を説いて弟子にする時は、耶蘇と同じいやうに(約翰傳第一章四十節より五十節まで)我れに從へと云ふのである、釋迦の弟子の中にも一人無花果樹の下で弟子になつた者がある(涅槃經)まだ妙なのは釋迦でも耶蘇でも、弟子になると多くは改名

するのみならず(馬可傳第三章十六節十七節涅槃經諸方傳道の爲め、弟子を派遣する時には、必らず二人づゝ(馬可傳第六章七節、路可傳第十章一節、涅槃經一所に遣る、次に雙方の教へた事柄が甚だ相似て居る、事柄ばかりではない、其文句も似て居る、又譬喩を引く鹽梅も似て居る、

路可傳第十七章と法句經百七十句、二十句八十九句、九十九句と、

路可傳第六句と句經法六十二句、百七十七句、二百八十六句、三百七十三句、三百九十六句と、

馬太傳第二十三章、同第二十五△と法句經七十三句と、馬太傳第五章と法句經二章二十三句、百〇三句と、

馬太傳第七章と法句經五十句、百二十九句、百三十句、百

三十三句、二百五十二句と、

耶蘇の初めて説教した時は、不幸なる人間の種類を擧げたが(馬太傳第五章三節以下)釋迦も其通りである、(神童遊戲經)耶蘇は預言者ヨナの外休徴を與へられずして奇蹟を斥け、富人の天國に入るは駱駝の針の穴を通るよりも難し、又人は神と財とに兼仕ふるゝ能はず、去れば生命の爲めに何を食ひ何を飲み、身體の爲めに何を衣んと思ひ、つと勞ふとなかれ』など、此の世の財寶を賤めたが、釋迦も其通りであつた、富人が耶蘇に従はんと思ふたが、己れの財産に離るゝことが出來ないで、從へなかつた、或る婆羅門が釋迦に従はんと思ふたが、矢張財寶に執著して居て果さなかつた、又此世のものは財寶のみではなく、家族までをも何んとも思つて居ない

とまでが能く似て居る。

釋迦も耶蘇も謙遜、平和、愛敬、克己、不犯及び五誠を説いて居る、又た人間の此の世に出づる前より、己れ存在して居たとも説いて居る(約翰傳第八章五十八節法華經)。生き居る間は兩人共貧しくして、己れの家といふべきものはなく(神童遊戲經)、諸方を遍歴して法を説き、人の疾病を癒すなど、種々不思議ある事をして居る(法華經)、其歎より罪人の友だと、誹謗せられた點も、死する前に罪人の婦の所で、御馳走にあつた點も相似て居る(涅槃經)、死せんとする前に、兩人共豫め天に歸らんとするを説いて居る(涅槃經及び法華經)、又死際には弟子達に極樂に往かるゝ爲め、助言してやると云ふを約束して居る、其死する時に天地が震動して、太

陽の光が失せ、星が天より墜ちたなど云ふたのも似て居る(涅槃經)。

以上ザイデル氏が釋迦傳と耶蘇傳と善く似て居て、而かも釋迦傳より竊んだものであると云ふ一二の例證に過ぎないが、今余が氣が附いた二三を擧ぐれば、

馬太傳第二十三章二十四節以下に偽善者を誡めたる語は、百喻經下卷二十四の句調と畧々同一である。

瞽者なる相者よ、爾等は蠅を漉出して駱駝を呑むもの也、あゝ禍あるかな偽善なる學者とパリサイの人よ、爾曹杯と盤の外を潔くして内には貪慾と淫欲とを充せり。

昔有國王設於教法諸有婆羅門等在我國內制抑洗淨不

洗淨者驅令策使種々苦役有婆羅門空捉澡罐詐言洗淨人爲著水即便瀉棄便作是言我不洗淨王自洗之爲正意故用避王役妄言洗淨實不洗之出家凡夫亦復如是剃頭染衣內實毀禁詐現持戒望人利養復避王役外似沙門內實虛欺如捉空瓶但有有外相、

馬太傳第二十四章三十二節前後と百喻經下品二十四とを比較せば

それ汝等無花果樹に由て譬を學べ、其枝すでに柔かにして葉萌めば夏の近きを知る、此くのとく汝等も凡て此等の事を見れば時ちかく門口に至るを知れ。

昔有一長者遣人持錢至他園中買菴婆羅果而欲食之而勅之言好甜美者汝當買來即便持錢往買其果果主言我

此樹果悉皆美好無一惡者汝嘗一果足以知之買果者言我今當一一嘗之然後當取若但嘗一何以可知尋即取果一一皆嘗持來歸家長者見已惡而不食便一切都棄世間之人亦復如是聞持戒施得大富樂身常安隱無有諸患不肯信之便作是言布施得富我自得時然後可信目覩現世貴賤貧窮皆是先業果報不知推一以求因果方懷不信須已自經一旦命終財物喪失如彼嘗果一切都棄。

路加傳第六章三十七節以下及び馬太傳第七章一節、二節等にある語は法句經惡行品に左の如くある、

擊人得擊 行怨得怨 罵人得罵 施怒得怒
人を議ること勿れ、然らば爾曹も議られず、人を罪する
となかれ、然らば爾曹も罪せられず、人を恕せ、然らば爾

曹も怒さるべし

法句經無常品道行品等にある句と馬太傳第二十四章馬可傳第十三章及び路加傳第十七章等に世人を警醒したる語調を二三相對照せば、

族姓男女 貯聚財産 無不衰喪 常者皆盡 高者亦墮 衆生相尅 以喪其命 非有子恃 亦非父兄 爲死所迫 無親可怙(無常品)

人營妻子 不觀病法 死命卒至 如水湍驟 父子不救 餘親何望(道行品)

其とき二人田に在んに、一人は取られ一人は遺さるべし、二人の婦磨ひき居らんに、一人はとられ一人は遺さるべし(馬太傳)

如此一時も我と偕に目を醒しをると能はざるか、惑に入らぬやう目を醒しかつ祈れ、其靈には願ふあれと肉體よわきなり(同上第二十六章四十節以下)

佛道を得んと欲するもの、爲めに最初諸惡莫作諸善奉行自淨其意是諸佛教等の意を説いて(法句經述佛品)次に安寧品の清淨無爲澹泊無事、苦は身に過ぐるあく、樂は滅に過ぐるあし、諸欲得甘露、棄欲滅諦快、欲度生死苦、當服甘露味と言ひたる如きは、恰も馬太傳第十九章十六節以下路加傳第十八章十八節以下等にある問答と殆ど同じである

若し生命に入らんと欲は、誠を守るべし、少者(少者の)こたへけるは何か、イエス曰けるは盜む勿れ、妄りの證を立つる勿れ、爾の父と母とを敬へ、又己れの如く爾の隣を愛

すべし、少者せうしやかれに曰ける、是みな我いさけなきより守れるものあり、何の虧たるところ我にある乎、イエス彼れに曰けるは全からん事を欲ほは、往て爾が所有しよを售て貧者に施せ、然れば天に於て財あらん、而して來り我に従へ。

若し雙方の書を繙ひて照し合せたあら、驚く程文句ご思想と偕に等しき點を見出すであらう、又同經述千品と馬太傳第五章二十九節以下及び馬可傳第九章四十三節以下等の教へは一つである。

千千爲敵 一夫勝之 未若自勝 爲戰中上 自勝最賢 故曰人雄 護意調身 曰損至終 雖曰尊天 神魔梵釋 皆莫能勝 自勝之人 月千反祠 終身不輟

不如須叟 一心念法

もし右の眼汝を罪に陥おさば抉出して之を棄よ、蓋五體の一を失ふは全身を地獄に投入れらるゝよりは勝れり、もし右の手汝を罪に陥おさば之を斷きて棄よ、そは五體の一を失ふは此身を地獄に投入れらるゝよりは勝れり。

又同經世俗品の中に財に就ては、馬太傳第六章十九節以下の句ご同一なるものがある、

雖多積珍寶 崇高至于天 如是滿世間 不如見道跡
不善像如善 愛如似無愛 以苦爲樂像 狂夫爲所致
蠹とくひ銹くさり盜うがちて竊む所の地に財を蓄ふる
ここ勿れ、蠹くひ銹くさり盜穿ちて竊ざる所の天に財

を蓄ふべし、蓋なんぢらの財の在るところに心も亦あるべければあり。

同經吉祥品の文句は亦格別である、梵志道士如來の許に來て何が最も吉祥なるやと問ひければ、如來は左の如く答へた

己信樂正法 是爲最吉祥 若不從天人 希望求僥倖
亦不禱祠神 是爲最吉祥

馬太傳第二十二章三十六節路加傳第十章二十七節に、教法師來て律法の中何れの誠が最も大なるやと問ひければ、耶蘇は答へて、

爾心を盡し精神を盡し意を盡して、主なる爾の神を愛すべし、これ第一にして最も大なる誠あり

と言ひしは全く同意義である、斯の如き工合であるが、今一々耶蘇の經文と佛の經文とを對照する時は餘り冗長に過ぐる恐れがあるから、唯だ其比較すべき佛典の主なるものゝみを舉ぐれば、法句經、神童遊戲經、涅槃經、法華經である、佛の僧侶達や、耶蘇宣教師達は美食安座せず、群盲の象を評するが如き人身攻撃は避けて、先づ此等の經文を互に精攻參照して貰ひたいものである。

耶蘇教が佛教の傳説を採つたものと云へば、先づ第一に起るは、耶蘇以前に佛教が猶太に傳つて居たかどうかと云ふ問題である、それにつきては先に述べた耶蘇の福音書と釋迦傳説及教理との關係三百五頁より三百十三頁までに、種々の書籍を引照して論じてある、其大体は斯ふである。

印度と波斯希臘等とは、古い時分即ち耶蘇紀元前五百九年頃、波斯王ダリユスが、人を遣つて印度河の源を捜さしめて居る。

希臘の歴史家クテジス、ヘロドトウス等も波斯人の傳ふる所に依つて、印度の事を書いて居る、ソクラテスの頃に、希臘の亞典に印度人の來て居たこともある、それに四世紀の終り頃に、アレキサンデル大王の波斯に攻め入つて印度へ行つてから以後、兩者の間に非常に密接な關係が生じて居る、アレキサンデルの死後直ぐ北印度國の始王ナヤンドラグプタがマセドン人を國外より放逐した、又アレキサンデルに代つて東洋の方を支配して居たゼレウス一世(ニカール)が、ナヤンドラグプタと和を講じて、娘を妻はし、且つ公使

を遣はして居る、阿育王の碑に希臘の王のアンテオフ、スプラトレメウス、アンテエーノス及マガスが佛教に歸依したと書いてある、又錫蘭の歴史にマハーバンサに希臘人へ法を傳へる爲めに遣はした人の名が掲つて居る、斯ふ云ふ次第だから、耶蘇紀元三世紀前頃にはスリヤ(アンテオフス第二世の頃)埃及(プロレメウスフィラデルフス王の時)キレーチ(メガス王の時)マセドン(アンテエーヌス、ゴンタタス王の頃)等に佛教徒が居たと見ても差間がなからう、其頃彼等の交通した陸路は、初めはカシミル、カブル、カンダハルを経て、波斯の東海岸を経て行つただらうが、紀元前一世紀の半ば頃からは、オクスス河の上部からカスピヤン海に到り、其處からカウカサスに行くか、或はエクバタナ及アルメニアを

經て黒海の岸に達したるものである。此處でシノーペー港より船にて希臘に達したものである。耶蘇紀元六十年前頃から、此海路に由つて印度と希臘との間の貿易は極めて盛んなものであつた。

プリニウスの書に一世紀の始め頃に印度とカハドシアと盛な通商貿易があつたことを書いてあるから、丁度福音書の出来る頃に耶蘇教徒の居た地方の東部を通つたものである。其外錫蘭から直接に亞刺比亞の南西岸に達して紅海を横切りて、アレキサンドリヤへ達した路があつたものだ。そうしてアレキサンドリヤから地中海の西に沿ふて、東方及西方へ進んで、羅馬あたりまでも行つたものである。羅馬との貿易は實に盛大なもので、プリニウスの言ふ所に

よれば、印度へ商船が行つて、種々寶石眞珠香料象牙絹布等を買込む爲めに、年々五千萬ゼスタルツも拂つたと云ふこと及び貨物の外に五百人も載せた印度の船が澤山來たことも書いてあるし、アレキサンドリアに澤山の印度人が居て諸方に來往して居たことも、又アウグストゥス帝の時、印度から公使が來て居て、其中に佛教家の有名なサルマーナエガス(即ちスラーマナーナアリヤ)之を譯すればスラーマナ阿闍梨の義なりも居た。

又クラウヂウスの許へ錫蘭から四人の公使を遣はしたことも書いてある、勿論錫蘭島から來たのだから佛教徒であつたに相違ない、又二世紀の終り頃に、バルデザチスといふ人印度の事を書いて、波羅門教や佛教徒の事は、印度より來

て居る公使から聞いたと書いてある、此等を見れば福音書の出来る頃に、耶蘇教徒の重要な都市アンナオヒーア、亞典、羅馬等に、佛教の學者が居たことが明かである。耶蘇は如何なる人であつたかと云ふことを結論する前に、先づ其の意義から始めやう。

第六 白粉を洗ひ落したる耶蘇

基督とは希伯來語のメシアの希臘譯で、膏灌かれた者と云ふ義である、舊約書ではメシアと名の附けられたる者は、王だの僧侶だの軍人だの四五人もある、誰れでも猶太人に恩恵を施した者はメシアと名づけ、異教信者の波斯王クロササヘメシアと書いてある、(以賽書第四十五章第一節)是れは猶太人のバビロンに擒に爲て居たのを放免して呉れたか

らである、未來に出て来る人の名にしてある所は唯の一個所もない。

耶蘇とは希伯來語のヨシユア、希臘の形ちでは神の助の意だ、其名の舊約書の中に見えて居る者は二人ある、第一はイスラエル人をカナンの地へ導いて來たヨシユア(民數紀略第十三章第十七節)第二は彼のメシア、クロスが放免した猶太人を引率して歸國した僧侶のヨシユア(以士喇書第三章第二節)である。

耶蘇教徒はキリストと云つて居るが、是れは耶蘇が此世に生れた時につけられた名ではない、髮結サンの胎内を出た時は耶蘇とつけたのを、後の者が尊奉してキリストと云ふ語を附したので、それも時代の變遷に従つて三度替つて居

る、最も古はキリスト・イエス、次がイエス・キリスト、其次が單にキリストと呼ばれる、様になつたのである、外國語であるから餘り耳立たないが、日本語であれば何うであらうか。さて耶蘇と云ふ男に就て歴史上儘を事柄は、

女髮結が兵隊さんを色に持つて懷胎した儘で、老いぼれ大工の所へ嫁づいて、生んだ其兒に、耶蘇と云ふ名をつけた。

世の中には隨分澤山あることで、私生兒には伶俐巧で特に悪智慧の發達した者が多いが、耶蘇も矢張り此種類の人間で、古から猶太人が他國人に苦められて困難した時には、何時でもメシヤの出現を望んで居た、耶蘇の時も羅馬の爲めに苦められて居て、矢張メシヤの出現

を望んで居たから、己れの名の昔猶太人の擒にあつたり、沙漠に迷ふたりして居た時に、救ひ出した人と同名あるを幸に、我こそメシヤだ、猶太の國を盛んにして世界各國を服従せしめん、大法螺を吹き立てたが、何分生れた時の事は、皆人々が知つて居るから、漁夫だの穢多だの姪賣婦だの、無智蒙昧の賤民が少し計り歸依したのみで、餘り人からは信ぜられぬ間に、捕へられて十字架に懸けられたのである、弟子の中の奸智に長けたる者が、其屍體を窃んで、耶蘇が復活したの、昇天したのと嘘をついたのである、其頃猶太に擴がつて居た釋迦の傳説や、舊約書のモーセ、エリヤ、エリザ等の傳説などを剽窃して、耶蘇の傳と云ふを捏造した、又其山師の中

には少し學者も居て、當時希臘あたりに行はれて居た
亞歷山亞派の哲學を附會して教義と云ふものを作つ
たのである。

女髮結と兵隊サンとの私生兒であると云ふとは、前にも述べたが、公然披露すべき性質のものでないから、弟子の七十人もあり兄弟の七八人もあり(馬太傳第十二章第四十六節、同第三章第五十五節、馬可傳第三章三十一節、同第六章三節、路加傳第八章十九節、約翰傳第二章十二節、第七章三節、乃至五節、同章十節、使徒行傳第一章十四節)從兄弟杯もあつたが一人も知らないのである。それに前に述べた様に、猶太人の希望して居たメシヤと人に思はせる爲めに、山師共が其系統を捏造したこ

こは、馬太傳路加傳の首めにある系圖を見れば第一に分る、若し彼等の言ふが如く、耶蘇が神の子で、マリアが聖靈に感じて生れたものとすれば、父親のヨセフの系圖を長々、而かも兩方大違ひの嘘八百の系圖を擧ぐる要がない、

馬太傳第一章第一節より第十七節に

アブラハムの裔なるダビデの裔イエスキリストの系圖

アブラハム、イサクを生み、イサク、ヤコブを生み、ヤコブ、ヨダとその兄弟を生めり、ヨダ、タマルに由て、ハレスとザラを生み、ハレス、エスロンを生み、エスロン、アラムを生み、アラム、アミナダブを生み、アミナダブ、ナアソンを生み、ナアソン、サルモンを生み、サルモン、ラハブに由りて、ボアズを生み、ボアズ、ルツに由りて、オベデを生み、オベデ、エツサイを生み、エツサイ、ダビデ王

を生み、ダビデ王ウリヤの書に由てリソロモンを生み、ソロモン、レハベアムを生み、レハベアム、アビアを生み、アビア、アサを生み、アサ、ヨサバテを生み、ヨサバテ、ヨラムを生み、ヨラム、ウツズヤを生み、ウツズヤ、ヨタムを生み、ヨタム、アカズを生み、アカズ、ヘゼキヤを生み、ヘゼキヤ、マナセを生み、マナセ、アモンを生み、アモン、ヨシアを生めり、バビロンに徙さる、時、ヨシア、エホヤキンと其兄弟を生み、バビロンに徙されたる後、エホヤキン、シヤテルを生み、シヤテル、ゼルバベルを生み、ゼルバベル、アビウデを生み、アビウデ、エリアキンを生み、エリアキン、アゾルを生み、アゾル、ザドクを生み、ザドク、アキムを生み、アキム、エリウデを生み、エリウデ、エリアザルを生み、エリアザル、マツタンを生み、マツタン、ヤコブを生み、ヤコブ、マリヤの夫ヨセフを生めり、此マリヤよりキリストと稱ふるイエス生れ給ひき、其世系を數れば、アブラハムよりダビデに至るまで十四代、ダビデよりバビロンに徙さ

る、時まで十四代、バビロンに徙されしよりキリストまで十四代なり、

又路加傳第四章第二十三節より第三十七節に

時にイエス年おほよそ三十にして福音を宣へ始む、人々にヨセフの子とおほよそ意れ給へり、ヨセフの父はヘリ、其父はマツタテ、其父はレビ、其父メルキ、其父はヤンナ、其父はヨセフ、其父はマタテヤ、其父はアモス、其父はナオム、其父はエスリ、其父はナムカイ、其父はマアツ、其父はマタテヤ、其父はセメイ、其父はヨセフ、其父はハユダ、其父はヨハンナ、其父はレサ、其父はゼルバベル、其父はシアテル、其父はチリ、其父はメルキ、其父はアツデ、其父はコサム、其父はエルモダム、其父はエル、其父はヨセ、其父はエリエセル、其父はヨオレム、其父はマツテ、其父はレビ、其父はシメオン、其父はユダ、其父はヨセフ、其父はヨナン、其父はエリアキム、其父はメレア、其父はマイナン、其父はマタツタ、其父はナタン、其父はダビデ、其父はエツサイ、其父はオベデ、其父は

ボアズ其父はサルモン、其父はナアソン、其父はアミナダブ、其父はアラム、其父はエスロン、其父はバレス、其父はユダ、其父はヤコブ、其父はイサク、其父はアブラハム、其父はナコル、其父はサルク、其父はラガラ、其父はバレク、其父はヘベル、其父はサラ、其父はカイナン、其父はアバザデ、其父はゼム、其父はノア、其父はラメク、其父はマトサラ、其父はエノク、其父はヤレド、其父はマレエル、其父はカイナン、其父はエノス、其父はセツ、其父はアダム、アダムは即ち神の子なり

是れは猶太の國を一統して、世界萬國に輝くやうな王となるには、是非ともダビデの子孫であること云ふことを示さんが爲めに、彼の系圖を捏造したものである、猶太人のメシアはダビデの子孫より出づると信じて居たことは、約翰傳第七章四十二節に

聖書にキリストはダビデの裔にてダビデの住みし郷ベツレヘムより出でんと録し、に非ずや

とあるにても知ることが出来る、而して其信據の基づいた所は、耶利米亞記第二十三章第五節に

ニホバいひたまひけるは、視よわがダビデに一の義しき枝を起す日來らん、彼王となりて世を治め榮え公道と公義を世に行ふべし、

及米迦書第五章第二節に

ベテレヘム、エフラタ汝はユダの郡中に小さき者なり、然れどもイスラエルの君となる者の中より我たみに出づべし、その出づる事は古昔より永遠の日よりなり

である、ヨセフは名も知られない大工の事だから、其系圖を詐つてダビデの子孫だと云ふことは何んでもないが、耶蘇

の生れた所がナザレであるから、常時猶太人の信じて居たメシアはベツレヘムより出づると云ふのに合はない、ソコで何にかベツレヘムに生れたやうに嘘をつく爲めに、苦心慘憺した様が見ゆる、馬太傳の方は耶蘇の兩親はベツレヘムに住んで耶蘇の生れたのもベツレヘムだが、ヘロデが殺さんとするを恐れて埃及へ逃げ、後ち歸て來た時にナザレに居たから、人からナザレ人のやうに思はれたのだと、罪もないヘロデを殘虐無道の人と誣いて、漸くベツレヘムに生れたことにした、路加傳の方は十何年も後にあつた戸籍調査を、ヘロデの頃にあつたやうに嘘をついて、ナザレは古郷であるが、戸籍に登録せらるゝ爲めに千年も前に先祖が居た村へ、夫婦件れで行き、旅舎に宿つて居る間に生れたこ

とにしてある、併し羅馬の戸籍調査は其祖先の居た所でなく、其父の居た所で戸籍に登録さるゝ、定めであつた而已ならず、女房や小供あごは、自身で登録所へ行かずとも、夫さへ出て、陳述すれば足りるのである、又猶太の戸籍調査法は決して女の事は頓着せぬことは、舊約書を見ても明である、それを態々御苦勞にも女房を件れて、十餘年後であければ無かつた戸籍調査に、千年も前に先祖の居た村へ行つたやうにして、やつとベツレヘムに生れたことに拵へた。此の路加傳と馬太傳と、言ふ所が違つて居るのは、如何なる理由かと云ふに、初めは馬太傳の通りの傳説であつたが、埃及は古より魔術で有名な處であるから、耶蘇反對者が、耶蘇が埃及に居たなら彼處にて魔術を覺えて來て、それを行ふ

たのだ、神の奇蹟といふのは何もない、魔術だ、魔術だと言つたから、これに懲りて路加傳は埃及へは行かぬことにする爲に、色々な捏造附會をしたのである、他の馬可約翰二傳の方は、恠巧だから、此の點は黙つて居る。

又聖靈に感じて生れたものだとか、神の子だとか、神だとか、有りもせぬ事共を並べ立てた故、神が惡魔に試みらるゝ、あざいふ不合理な話(馬太傳第四章第一節乃至第十一節、馬可傳第一章第十二節乃至第十三節、路加傳第四章第一節乃至第十三節)やら、洗禮を受けた時神の靈の鴿の如くなりて其上に降りり(馬太傳第三章第十六節、馬可傳第一章第十節、路加傳第三章第二十三節、約翰傳第一章第三十二節より第三十三節)あざ、取り褻の合はぬ話を案出して、如何にも實らし

く思はせやうとして居るが、實に滑稽な話で、神でありながら惡魔に試みらるゝ様な神あら、到底人間が頼りて惡より救ひ出して貰ふ譯には行かぬ、又聖靈に感じて生れた耶蘇神の子である耶蘇神である耶蘇に、何の要あつて聖靈が鴿の如くなつて其上に降つたか、マリヤの感じた聖靈の度が弱かつたからか、左すれば山出の下女が白粉を塗つて、一度でよくつかぬ故、二度三度もつけ直しをするこ一般だ、地肌が地肌であるから、聖靈の白粉は、何度塗つても直ぐ剥げて仕舞ふ、約翰傳第一章第三十二節より第三十四節に

ヨハネまた證して曰けるは、われ靈の鴿の如く、天より降りて其上に止れるを見たり、我は彼を識ざれど我を遣し、水にてバプテスマを施さしめし者、われに曰けるは、爾靈くだりて其上に止るを見ん、彼は聖靈を以てバプ

テスマをなす者なり、我これを見て其神の子たるを證せり

此のバプテスマのヨハネが馬太傳第十一章第二節より第三節、路加傳第七章第十九節に、弟子を耶蘇の許に遣はして、其キリストなるや否やを尋ねさせたこと云ふに至つては、滑稽も此に至つて殆ど腹の皮がよれる位である。併しこれだけ捏造附會しても、未だ人が信ぜぬかと恐れたが故に、舊約書にある種々の預言に應つて居ると、有りもせぬ話を附會して、事實らしく示さんとしたが、元來漁夫だの穢多だの、舊約書を能く解し得ない奴ばかりで作り出した話だから、舊約書に斯く々々の預言があると云ふ其預言は、一つも耶蘇に關した預言でないことは、前に述べて置た通りである。

又死者を甦らしたとか、盲者の目を啓けたとか、跛者の足を立たせたとか、海上を歩行したとか、三四片の麵包で五千人も満腹せしめて、未だ屑が籠に五六十杯も残つたとか、有らゆる奇妙奇天烈の事があるが、新約書中古いもの程其話が少ないから可笑しい。新約書に四福音書の外に使徒ポロの書いた手紙と稱するものが十四通ある、所が近來の研究に依れば、其中羅馬書加拉太書哥林多前後書のみが眞物で、四福音書よりも前に書かれたものと定つて居るが、此四書の中には奇妙な話が四福音書に較ぶれば遙かに尠ない、生前歸依する人の少なかつたことは、前に述べて置たから此處には述べない。

耶蘇の自から猶太人の王であるとか、猶太の國を盛大なる

ものにするとか言つて居り、弟子も亦爾か思つて居たことは、弟子が耶蘇の國の建設さるゝ時に、誰れが最も高き位に据へらるゝべきかと云ふことについて争ふた事のあるのでも分る(馬太傳第二十章第二十節より第二十八節迄)故に耶蘇の捕はれて刑に處せらるゝ時、弟子等皆驚きて逃げ去り、一人も其の傍にゐた者は、馬太傳第二十七章第五十五節以下馬可傳第十五章第四十節以下を見て、耶蘇の刑に處せらるゝ時、あたりに居たのは婦女子のみである(路加傳第二十三章第四十九節は曖昧を書き様である、約翰傳第十九章第二十五節以下は弟子の一人も其傍に居るかつたといふは不都合だと思ふと見えて、一人だけ居ることに書ひてある。

併し咽元過ぐれば熱を忘るゝかいひ、兎かく榮華の夢は見たいものであるから、時日を歴ると耶蘇の捕はれた時の恐ろしさを忘れ、豫ねて汝等の死せぬ中に再び來りて國を建つると言つた、耶蘇の語を思ひ出し、耶蘇の死んで五六十年後までも、弟子共は耶蘇が再び來て此世に盛大な國を創むると思つて居たことは、眞物と定まつた手紙、及耶蘇死後五六十一年の頃に出來たものと、皆んを學者の一致して居るころの黙示録に出て居る。又耶蘇の十字架に釘けられた時の様子などは、疑ひもなく後人の捏造である、而かも甚だ拙ない捏造である。第一馬太傳第二十七章第四十六節に

三時頃イエス大聲にエリエリマサバクタニと呼はりぬ、之を譯けば吾

神わが神なんぞ我を遣てたまふ乎と云へる也

是れは馬可傳第十五章第三十七節にもあるが、耶蘇は一体何の爲めに此世に出たといふのか、世の人の罪に代りて十字架に釘けられて以て、世の人の罪の贖をささん爲めだといふのではないか、左すれば十字架に釘けらるゝのが、此の世に生れた唯一の目的である、今此の唯一の目的の達せらるゝ時に喜びこそすべけれ、何の爲めこの歎息の聲を發したか。

第二馬太傳第二十七章第五十二節及五十三節に

慕ひらけて既に寝ねたる聖徒の身おほく甦へり、イエスの甦れる後墓を出て聖城に入りおほくの人に現れたり、

此等の聖徒が其後何れに行つた者もないのは如何の譯で

あらうか、ごうせ死んだ者が幽霊の如くに出て來たのだから、消ゆるのも幽霊の如くに消えたのであらう。

第三約約翰傳十九章第三十四節に

一人の兵卒戈にて其脅を刺ければ、直に血と水と流れ出たり、

此の一事は他の三傳には、少しも見えない、何の爲めに耶蘇の屍骸だけ戈にて其脅を刺したものであらうか。又血と水と流れ出でたとあるのも可笑しい、生きて居る中なら血は流るゝが、人は死すれば血は凝結して流れぬものである、水は全体何處より出たのであるか、多分膀胱の邊であらう、若し未だ生きて居る中に刺きたらんには、血と水と混じて、全体血の如くありて出つる筈だから、血と水と流れ出たと區別が出來ぬ、死してから後に刺したから、水ばかり

で血は流れ出ぬ筈である。

斯く理屈に合はぬ、而かも他の傳に少しも見えぬ新事實を、最後に出来た約翰傳に載せてあるのは、如何を理由かといふと、他の譯ではない、耶蘇の弟子等は耶蘇の死後再び蘇生したと主張するが、反對の者から攻撃せられて、否耶蘇は蘇生したので無い、若し眞に十字架に釘けられた後に尙ほ耶蘇が生きて居つたとすれば、それは弟子等が盗み去つて、十字架の上に在つた時間が短かつたから、死に切らなかつたので、通例四五日も置かずば死に切らぬ(日本の磔刑とは異つて槍にて脇腹を刺さぬ、たゞ十字架に釘つけ、飲食物を與へず、自然に死するのを待つのである)のを、耶蘇教徒共の言ふが如く、六時間か七時間位(四傳とも此點大抵同じ)しか十字

架上に置かないで、直ぐ取り降りして仕舞つたから、死な無かつたのだと攻撃せられたので、約翰傳の著者が特に新事實を加へ、確に死したるに相違なき様に見せたのである、それは約翰傳第十九章第三十五節に

之を見し者證を立つ、その證は眞なり、彼また自ら言ふところの眞なるをしる、爾曹をして信せしめんが爲なり

と態々證言を擧げて、其上例の舊約書の馬鹿らしき事柄を預言に應ふと言ふて居る、即ち約翰傳第十九章第卅七節に

又他の書に彼等の刺し、者を彼等觀るべしと云へり

とある、此預言は出埃及記第十二章第四十六節にあるが、是れは「逾越節の羊は其骨を折るなかれ」とあつて、全く宗教上の儀式を教たものである、

約翰傳第十九章第三十二節より第三十七節迄

是に於て兵卒等イエスと偕に十字架に釘られし者の一人の脛を先にをり次に亦一人の脛を折り、後にイエスに來しに已に死にたるを見て其脛を折らざりき、一人の兵卒戈にて其脊を刺さければ直に血と水と流れ出でたり、之を見し者證を立つ、その證は眞なり、彼また言ふ所の眞なるを知る、爾曹をして信せしめんが爲めなり、この事成れり、録して其骨の一をも措かざるべしと有るに應はせん爲めなり、また他の書に彼等の刺し者を彼等觀べしと云へり。

此の他の書とは何書を指したのであるか、引照には詩篇第二十篇第十六節、撒加利亞書第十二章第十節とある、詩篇第二十二篇の事は前に述べたから此には又ればまたことに述べないが、撒加利亞書第十二章は決して耶蘇の事ではな

い、この我を刺したる者とはエホバを刺したるもの、即ち詩的言語を用ゐずば我を凌辱したる者の意である。

第七 耶蘇自身の説きたる教

我輩が斯の如く耶蘇の身上につき研究するのを見て、或は耶蘇教徒中、耶蘇は耶蘇、耶蘇教は耶蘇教で、よし耶蘇は私生兒であつたにもせよ、神の子でなかつたにもせよ、將た又た善人でなかつたにもせよ、其の教ゆる所だに善かつたから、耶蘇教は信じて差聞ないであらう、孔子も叔梁紇與顔氏女野合而生孔子と史記孔子世家に見えて居るが、野合して生れたとて、孔子の大聖人たるに於て何たる變りもないかご、辨護をする者もあるであらうが、是れは飛んでもない所へ孔子様を擔ぎ出すので、丁度盜賊が捕はれた時に、他の盜

人をも引合に出して、己れの罪を免れんとする様なものである。成程耶蘇教の大部分は後人の附會には相違ないが、耶蘇教は耶蘇によりて立てゐるのだから、耶蘇が居なければ耶蘇教がないのである。如何となれば耶蘇神、世の救世主、世の罪を贖はんが爲めに、マリヤの胎を借りて此世に降り給へるものといふのが、耶蘇教の主眼である。故に耶蘇の身上に變動が生ずれば、直ちに耶蘇教に變動が生ずる。耶蘇は私生兒である、神の子ではないといふことに極ると、耶蘇教の教義は即坐に倒るゝのである。孔子様と話が違ふのである。吾等は論語など孔子様の教へられたといふものを尊奉してゐるのは、眞理であるが故で、決して孔子の教であるといふ故でない。よし孔子でなく孟子にもせよ、荀子にもせよ、論

語に書いてある通りのことを教へたら、矢張り尊奉するのだ。又た如何に孔子の教といつても、眞理でないことは信ぜぬのである。又た孔子の教を奉するものゝ中に、瘋癲白痴の外は、孔子の言であるから、理由は解らないが尊奉するといふ人は一人もあるまい。

耶蘇の宣教師等は、『我等は基督の神なることを信ず、聖書が斯く教ゆるが故に、聖書の教ゆることは眞なり、如何なるれば神の言葉基督の言葉なればなり』などいふ極めて滑稽な理由を付けるが、斯る論法で孔子の教を尊奉してゐる者はない。耶蘇は私生兒である、神でない、大法螺吹であるとなると、耶蘇教は根本的に滅裂して仕舞ふのである。

馬太傳第五章より第七章までに、耶蘇が山の上にて説いた

教が列記してある、是れは他の三傳には處々に散つて居るが、山上説教として、耶蘇教では耶蘇の口から説いたものとして、最も有り難く最も大切にして居るものである、今此の山上説教といふものが、果して何程の價値を有して居るものであるか、試に吟味して見やう、此の説教中

第一、柔和なる者、義を慕ふ者、矜恤ある者、心の清き者、和平を求むる者を幸福なりと賞讃したのは、無理からぬことであるが、心の貧しき者、即ち愚者、貧者、餓者、哭者、路加傳第六章第十節第二十一節を福なりとし、富者、飽者、笑者を禍なりとしたのは、果して何の理に基づきたるやを知ることが出来ないのみならず、其の教へた所は厭世主義が多い、此の世の學術、智識、財産、繁榮等は悉く禍であるとして居る。

生命の爲めに何を食ひ、何を飲み、又身體の爲めに何を衣んと憂慮するとはならぬ、天空の鳥を見よ、稼ことなく穡ことを爲す、食に善ふることなし

(馬太傳第六章第二十五節以下)

是故に明日の事を憂慮なかれ、明日は明日の事を思わづらへ、一日の苦勞は一日にて足れり(馬太傳第六章第十九節乃至第二十一節)

即ち人に不性、怠惰、不淨を教ゆるもの、其日暮を教ゆるものである、此處ばかりでない、凡て富者は如何に戒を守り、如何に教に従ふとも、其財産を有つ間は、決して天國に行けぬ。

馬太傳第十九章第十六節より第二十四節に

或人きたりて彼に曰けるは、善師よ、我がぎりなき生を得んが爲には何の善事を行すべきか、彼に曰けるは、何故われを善と稱や、一人の外に善者はなし、即ち神なり、若し生命に入らんと欲は、誠を守るべし、彼こたへける

は何か、イエス曰けるは殺す勿れ、姦淫する勿れ、盗む勿れ、妄りの證を立る勿れ、爾の父と母を敬へ、又己の如く爾の隣を愛すべし、少者かれに曰けるは是みな我いとけなきより守れるものなり、何の虧たるところ我にあるや、イエス彼に曰けるは全からん事を欲はば往て爾が所有を售て貧者に施せ、然れば天に於て財あらん、而して來り我に従へ、少者この言を聞て愛へ去ぬ彼の産業おほいなりければなり、イエスその弟子に曰けるは誠マテに爾曹に告ん、富者は天國に入ること難し、又爾曹に告ん、富者の神の國に入よりは駱駝の針の孔を穿るは却て易し、

馬可傳第十章第十七節より第二十五節に

イエス途に出けるに一人はしり來りて跪き問けるは、善師よ我がざりなき生命を嗣ために何を行すべきか、イエス彼に曰けるは何ぞ我を善と稱や、一人の外に善者はなし、即ち神なり、誠は爾が識ところなり、姦淫する勿

れ、殺すなかれ、盗なかれ、妄の證を立る勿れ、拐騙なかれ、爾の父と母を敬へ、答て曰けるは師よ是みな我が幼きより守れるものなり、イエス彼を見て愛み曰けるは爾なほ一を虧ゆきて其所有をうり貧者に施せ、然ば天に於て財あらん、而して來り十字架を操て我に従へ、彼この言に因て哀み憂て去ぬ彼は大なる産業を有る者なればなり、イエス環視てその弟子に曰けるは財を有る者の神の國に入は如何に難かな、弟子この言を駭けり、イエス復こたへて彼等に曰けるは小子よ財を恃む者の神の國に入は如何に難かな、富者の神の國に入よりは駱駝の針の孔を穿るは却て易し、

即ち貧民になれと教ゆるのである、耶蘇の教へた通り人の守らねばこそ世も幸福なのである、若し其耶蘇教徒となり、眞に耶蘇の教へた通りを守るなら、家は亡び國は滅し、世の中は野蠻の有様に歸するのである。

由來耶蘇教は唯だ怠惰貧苦を獎勵するのみならず、學術の進歩を害するものである。試に思へ若し學術にて研究することが、耶蘇教の主義に乖るといふなら、學術は神に背き罪惡を産むの母である、もし其研究する所が耶蘇教に教ゆる事と同じいとすれば、完全無缺金甌の如き耶蘇教の既にある上は、學術は無用のものであるといふのは、耶蘇教徒の議論として必然の結果である。左ればこそ古より有名な亞歴山の文庫をも、學者をも焼き殺したりしたのである。耶蘇教全盛の中世紀が暗黒時代であつたのもこれが爲めである。第二は、耶蘇教徒が金科玉條の如く言ひ唱へ、耶蘇も亦凡そこの律法と預言との因で立つ所と言つて居る、己れの敵を愛せよといふことである。

馬太傳第五章第三十八節より第四十四節に

目にて目を償ひ齒にて齒を償へと言ふこと有は爾曹が聞し所なり、然ぞ我なんぢらに告ん、惡に敵すること勿れ、人なんぢの右の頬を批ば亦ほかの頬をも轉して之に向よ、爾を誣て裏衣を取んとする者には外服をも亦とらせよ、人なんぢに一里の公役を強なば之と偕に二里ゆけ、爾に求る者には予へ借らんとする者を卻る勿れ、爾の隣を愛みて其敵を憾べしと言ふこと有は爾曹が聞し所なり、然も我なんぢらに告ん、爾曹の敵を愛み、爾曹を誣ふ者を祝し、爾曹を憎む者を善視し、虐遇迫害もの、爲に祈禱せよ、是れは一寸聞けば甚だ深遠高尚な様に思はるゝが、少しく考へると世の中にこればかり馬鹿げた教はない、己れの敵をも愛するは、所謂慈悲で無理からぬことだが、

人汝の右の頬を批ば亦ほかの頬をも轉じて之に向けよ、爾の裏衣を取ら

んとする者には外服をも亦とらせよ、一里の公役を強ひなば二里ゆけといふに至つては、到底行ひ得べき話でない、試に思へ、此主義なら露西亞が日本に向つて北海道を呉れと言つたら、日本全國を明け渡さねばならぬ次第である、ユシナ主義が行はれて堪るものでない、何の國に誰れがユシナ主義を實行するものがある、今日の所謂耶蘇教國、所謂耶蘇教徒は、

人は右の頬を批てといへば左の頬まで撃つ、上衣をやるといへば裏衣まで剝ぐ、一里だけ爾の爲めに行かんとは二里も強ひて行かす、の輩のみである、到底行ひ得べからざる教訓である、

或人曰以徳報怨如何、子曰何以報徳以直報怨以徳報徳(論語憲問第十四)とある孔子の教訓の方は萬世不易の言である、

第三は、天父へ對する祈禱であるが、これは先にも述べた通

り、タルムードより盗んだもので、耶蘇教の神がないとすれば祈禱は不必要のものである、

其他は復讐、誓言を禁じ、人間一般には關係のなきものを除けば、パリサイ人に對する聞くに堪へぬ罵詈譏や、耶蘇の弟子に對する教訓等や、耶蘇と舊約の關係のみである、

此の山上説教の外耶蘇の教へたことに、忠孝の道など教へた言語は一言もない、耶蘇教徒は耶蘇が

カイザルの物はカイザルに歸へし、また神の物は神に歸すべし

と唯一言あるを見て、己れの君を罵りて狐といひたる(路加傳第十三章第三十二節)耶蘇、忠君の道を教へたとといふされど此語のある前後を見れば、

路加傳第二十章第十九節より第二十六節に

祭司の長學者等その己を指て此譬を語たるを知、この時イエスを執へんと爲せしかども民を畏たり、即ち之を窺ひその言を取て方伯の政事の權威に解さんとして自ら義人と僞れる問者を遣せり、就てイエスに問けるは師よ我儕なんぢの言ところ正く、かつ偏らず誠を以て神の道を教るを知、われら税をカイザルに納るは宜や否、イエスその詭譎なるを知て曰けるは何ぞ我を試るや、テナリを我に見せよ、此像と號は誰なるか、答てカイザルなりと曰、イエス曰けるは、然ばカイザルの物はカイザルに納め、神の物は神に納よ、かれら民の前に其事を執得ず、且その答を奇と意て默然たり。

一時の遁辭である、これ猶太人は貢を羅馬に納むるを欲せず、爲めに屢々一揆を起し騷亂をなしたるは、其の頃の歴史で明である、パリサイ宗の人々も、耶蘇は貢を羅馬に納むべ

しとは云はぬであらうと思つた、若し爾か言ふならば、人民怒りて直に暴行を加へんと、若し貢を納むるに及ばずと言ふならば、直ちに羅馬政府に訴へんとしたからである、耶蘇は此の窮境に落されたが爲めに極めて曖昧な返事をして、一時を遁れたのである、即ち

彼等其答を奇として默然たりし

とあるを見ても知れる。

耶蘇自身は税を納むることを欲しかかつた、馬太傳第十七章第二十四節より二十七節に

彼等カペナウンに来れるとき納金を集る者どもペテロに来て曰けるは、爾曹の師は納金を出さざる乎、然すと曰てペテロ家に入しとき、イエスマづ彼等に曰けるは、シモン爾は如何おもふや、世界の王たちは税および貢

を誰より徴か、己の子よりか他の者よりか、ペテロ彼に曰けるは他の人より徴なり、イエス彼に曰けるは然ば子は與ることなし、然ど彼等を礙かせざる爲に爾海に往て釣を垂よ、初につる魚を取てその口を啓かば金一を得べし、其を取て我と爾の爲に彼等に納よ、

此の一時の遁辭が唯一言あるばかりに、自から猶太人の王と稱し、己れの君を狐と呼び、自ら税を納むることを欲せざりし者が、忠君の道を説いて居ることは、曲解にも程があると云ひたくなる。

又た耶蘇は親に孝を盡すべしとは一言も陳べぬ、親を見ると路上の人を見るが如く、時によりてはケンツクを喰はせることもあつた。

約翰傳第二章第三節及第四節に

葡萄酒罄ければ母イエスに曰けるは、彼等に葡萄酒なし、イエス彼に曰けるは、婦よ爾と我と何の與あらんや、我時は未だ至ず、女よ我れ汝と何の關りあらむや、

耶蘇が悪魔を逐出さんとする時、悪魔の發した語でまた前列王紀略第十七章第十八節にもあつて

婦エリヤに言けるは、神の人よ、汝なんぞ吾事に關涉るべけんや、汝はわが罪を憶ひ出さしめん爲め、又わが子を死しめんために來れるか、

憤怒の餘りに出づる言語である。

其他馬太傳第十二章第四十六節乃至第五十節に

イエス人々に語をる時、その母と兄弟かれに言はんとて外に立ちければ、或人イエスに曰けるは爾の母と兄弟なんじに言はんとして外に立ち、イエス告し者に答て曰けるは誰ぞ、我兄弟は誰ぞや、手を伸その弟子を指て

曰けるは是れわが母わが兄弟なり蓋すべて我が天に在す父の旨を行ふ者は是わが兄弟わが姉妹わが母なれば也

馬可傳第三章第三十一節より第三十五節に

その兄弟と母と來りて戶外にたち人を遣してイエスを呼びしむ多の人々イエスを環て坐したりしが彼に曰けるは見よ爾の母と兄弟戶外に在て爾を尋ぬイエス答て曰けるは我母わが兄弟は誰ぞや

併し之れよりも猶一層甚しき所がある、路加傳第十四章第二十五節及第二十六節に

多の人々イエスと偕に行しが、イエス顧みて彼等に曰けるは、凡そ我に來てその父母妻子兄弟姉妹また己の生命をも惜む者に非ざれば我弟子と爲ことを得ず、

一方後の言は「我を尋ぬ」と解也。

其父母を憎めと言ふてある、如何に曲解に巧な宣教師でも

此の文句の辯護の仕様は出るまゝあるまい此の文句はイサンをいせしむるに

又た蘇耶の教は猶太人民のみを主としたもので、世界萬國に傳へる積りではなかつたのである、夫れも其筈、耶蘇自身は猶太人が前より希望してゐた猶太を一統して世界に輝くやうな、強盛を王國を建るといふメシヤと自ら法螺を吹たのだから無理のない話である。

馬太傳第十五章第二十一節より第二十七節に

イエス此を去てツロとシドンシドンの地に往けるに、其地に住めるカナンの婦いで、呼はり曰けるは、主よダビデの裔よ、我を憫み給へ、我むすめ鬼に憑れて甚く苦めり、イエス一言も彼に答ざりしかば、其弟子きたり請て曰けるは我俯の後より呼はる故に彼を去せ給へ、答て曰けるはイスラエルの家の迷へる羊の外に我は遣されず、婦きたり拜して曰けるは、主よ我を助

たまへ答けるは兒女のパンを取て犬に投與ふるは宜からず、婦いひけるは、主よ然れども犬もその主人の膳より落る屑を食なり

と異邦人をば犬と同等を者ご見て居る、其上馬太傳第十章第五節にも

イエスこの十二を遣さんとして命じ曰けるは、異邦の途に往なかれ又サマリア人の邑にも入るなかれ、

併し馬太傳第二十八章第十七節に「イエスを見て拜せり、然れど疑へる者もありき」といひ、馬可傳第十六章第十五節に「イエス彼等に曰ひけるは、偏く世界を廻ぐりて凡ての人に福音を宣傳へよ」といひ、路加傳第二十四章第二十七節に「故にモーセより凡ての預言者を始め、凡ての聖書に於て己れに就ての事は解明されたり」といふは、後より他國人の耶

蘇の教を信じたのが捏造附加したるものである。

耶蘇教が猶太人に限るべきものであつたのを、後に他國人が猶太のみに限らないと唱た、其時耶蘇に隨身して直接教を聞いた者は、皆な耶蘇の教は猶太人にのみ傳ふべきものであると主張した、若し耶蘇が世界萬國に己の教を傳へよと言つたなら、古參の弟子の此の主張はあい筈である、弟子間に久しく議論あつて此議論の爲め教會の不和になつたと、及び遂に他國人派が勝を占めたことは、耶蘇教會歴史を見た人は皆知つて居るが、今は餘り長くなるから、繁冗を避け略するとしやう。

第八耶蘇教の教理

耶蘇神の無學文盲なるを

耶蘇の窃盜

耶蘇教は多神教なり

耶蘇教の神は金貨なり、舊約書は嘘八百、舊約書の出版を禁止すべし。

耶蘇教の教義の大体を云へば

神が天地を六日の間に造り給ひ、後ち人間を造つて其中に置いたが、人間が悪くなつたから、大洪水を起して、義人なるノアの一族を残す外は、盡く絶滅したが、此子孫が復た悪くなつたので、神は己れの子イエスを降して、世人の罪惡に代つて苦痛せしめた、故に耶蘇に頼り助け給へと言ふ者は天國に生るゝが、否らざる者は地獄に行くこと云ふのである。

第一此天地の創造は、耶蘇教側の傳では耶蘇紀元前四千九十四年、即ち今より大凡六千年程前であると云ふことであるが、今日學術上研究して得た所によれば、生物が此世に現れて以來、一億年から經つて居る、人間が此世に現れてから、でも、少くとも五十萬年内外は經つて居る、舊約書の六千年と比較して見れば、實に大變な相違である、今日學術上生物の出來た順序は、先づ第一に無頭蓋類、次に魚類、次に爬蟲類、次に哺乳類といふ具合で、最後に人間が出來たものである、其各種類存在の時期は、長きものは五千萬年、短きものも三百萬年を下らない、創世紀に書いてある所では、凡ての動物が一日に出來て居るが、僧侶等は學術の進歩に適はないと思つたか、此一日は千年位の長さだと云つて居る、一層のこ

と一億年位の長さだと言つた方が善かつたのである、併し
 そう都合好くは行かぬ、一千年は勿論唯の一月にも伸ばせ
 ない、何ぜならば夕あり朝あり是れ第五日なりと、明かに朝
 から晩までの一日だと書いてある、今其原文を擧げて少し
 く批評して見やう

創世紀第一章より第三章に

元始に神天地を創造したまへり、地は定形なく曠空くして、わなし黑暗淵やみほらの面に
 あり、神の靈、水の面を覆ひたりき、神光あれと言ひたまひければ光ありき、
 神光を善しと觀たまへり、神光と暗を分ちたまへり、神光を晝と名け暗を
 夜と名けたまへり、夕あり朝ありき、是れ^其晝の^日なり、神言ひたまひけるは
 水の中に穹蒼ありて水と水とを分つべし、神穹蒼を作りて穹蒼の下の水
 と穹蒼の上の水とを別ちたまへり、即ち斯くなりぬ、神穹蒼を天と名けた

まへり、夕あり朝ありき、是れ二日なり、神言ひたまひけるは、天の下の水は
 一處に集りて乾ける土顯るべしと、即ち斯くなりぬ、神乾ける土を地と名
 け、水の集合るを海と名けたまへり、神之を善しと觀たまへり、神言ひたま
 ひけるは、地は青草と實^{たけ}を^ひを生ずる草蔬と、其類に従ひ果を結びみづから
 核をもつ所の果を結ぶ樹を地に發出すべしと、則ち斯くなりぬ、地青草と
 其類に従ひ實^{たけ}を^ひを生ずる草蔬と、其類に従ひ果を結びてみづから核をも
 つ所の樹を發出せり、神これを善しと觀たまへり、夕あり朝ありき、是れ三
 日なり、神言ひたまひけるは、天の穹蒼に光明ありて晝と夜とを分ち、又天
 象のため時節のため日のため年のために成るべし、又天の穹蒼にありて
 地を照す光となるべしと、即ち斯くなりぬ、神二の巨なる光を造り、大なる
 光に晝を司ごらしめ、小き光に夜を司ごらしめたまふ、また星を造りたま
 へり、神これを天の穹蒼に置きて地を照らさしめ、晝と夜を司ごらしめ、光

と暗を分たしめたまふ神これを善しと觀たまへり、夕あり朝ありき、是れ四日なり、神言ひたまひけるは、水には生物饒ニギハヤヒに生じ、鳥は天の穹蒼の面に地の上に飛ぶべしと、神巨なる魚と水に饒ニギハヤヒに生じて動く諸の生物を其類に従ひて創造り、又羽翼ある諸の鳥を其類に従ひて創造りたまへり、神之を善しと觀たまへり、神之を祝して曰く生うよ繁息ハルニよ、海の水に充みつて、又禽鳥は地に蕃息よと、夕あり朝ありき、是れ五日なり、神言ひ給ひけるは、地は生物を其類に従て出し、家畜と昆蟲と地の獸を其類に従て出すべしと、即ち斯くなりぬ、神地の獸を其類に従て造り、家畜を其類に従て造り、地の諸の昆蟲を其類に従て造り給へり、神之を善しと觀給へり、神言ひ給ひけるは、我儕に象りて我儕の像の如くに我儕人を造り、之に海の魚と天空の鳥と家畜と全地と地に匍ふ所の諸の昆蟲を治めんと、神其像の如くに人に創造つくたまへり、即ち神の像の如くに之を創造り之を男と女に創造りたま

へり、神彼等を祝し、神彼等に言ひたまひけるは、生よ繁息よ、地に満みちよ、之に従服せよ、又海の魚と天空の鳥と地に動く所の諸の生物を治めよ、神言ひたまひけるは、祝よ我全地の面にある實み實みのなる諸の草蔬と、核ある木菓の結る諸の樹とを汝等に與ふ、これは汝らの糧となるべし、又地の諸の獸と天空の諸の鳥および地に匍ふ諸の物等、凡そ生命ある者には我食物として諸の青き草を與ふと、即ち斯なりぬ、神其造りたる諸の物を視たまひけるに、甚だ善かりき、夕あり朝ありき、是れ六日なり、斯く天地および其衆群悉く成りぬ、第七日に神其造りたる工を竣へたまへり、即ち其造りたる工を竣へて、七日に安やす息みたまへり、神七日を祝して之を神聖かめたまへり、其は神其創造爲したまへる工を盡く竣へて、是日に安息やすみたまひたればなり、エホバ神地と天を造りたまへる日に天地の創造られたる其由來は是なり、野の諸の灌木は未だ地にあらず、野の諸の草蔬

は未だ生ぜざりき其はエホバ神雨を地に降らせたまはず亦土地を耕す人なかりければなり霧地より上りて土地の面を遍く潤したりエホバ神地の塵を以て人を造り生氣を其鼻に嘘き入れたまへり人即ち生靈いきりょうとなりぬエホバ神エデンの東の方に園を設けて其造りし人を其處に置きたまへりエホバ神觀るに美しく食ふに善き各種の樹を土地より生せしめ又園の中に生命の樹および善惡を知るの樹を生せしめ給へり河エデンより出て園を潤し彼處より分れて四の源となれり其第一の名はピンンといふ是は金あるハピラの全地を繞る者なり其地の金は善し又ブドラクと碧玉彼處にあり第二の河の名はギホンといふ是はクシの全地を繞ぐる者なり第三の河の名はヒデケルといふ是はアツスリヤの東に流るゝものなり第四の河はユフラテなりエホバ神其人を繋つなりて彼をエデンの園に置き之を理め之を守らしめ給へりエホバ神其人に命じて言ひた

まひけるは園の各種の樹の果は汝意のまゝに食ふことを得然れど善惡を知るの樹は汝その果を食ふべからず汝之を食ふ日には必ず死ぬべければなりエホバ神言ひたまひけり人獨なるは善からず我彼に適ふ助者を彼のために造らんとエホバ神土を以て野の諸の獸と天空の諸の鳥を造りたまひてアダムの之を何と名くるかを見んとて之を彼の所に率ゐたまへりアダムが生物に名けたる所は皆其名となりぬアダム諸の家畜と天空の鳥と野の諸の獸に名を與へたり然れどアダムには之に適ふ助者みえざりき是に於てエホバ神アダムを熟く睡らしめ睡りし時其肋骨の一を取り肉をもて其處を填塞つみたまへりエホバ神アダムより取りたる肋骨を以て女を成くり之をアダムの所に攜つきたりたまへりアダム言けるは此こそわが骨の骨わが肉の肉なれ此は男より取たる者なれば之を女と名くべしと是故に人は其父母を離れて其妻に好合あひ二人一体とな

るべし、アダムと其妻は二人俱に裸体にして愧ぢざりき。

エホバ神の造りたまひし野の生物の中に、蛇最も狡猾し、蛇婦に言ひけるは、神眞に汝等園の諸の樹の果は食ふべからずと言たまひしや、婦蛇に言ひけるは我等園の樹の果を食ふことを得、然れど園の中央に在る樹の果實をば神汝等之を食ふべからず、又之に捫るべからず、恐くは汝等死なると言ひ給へり、蛇婦に言ひけるは、汝等必ず死ぬる事あらじ、神汝等が之を食ふ日には、汝等の目開らけ、汝等神の如くなりて善惡を知るに至るを知りたまふなりと、婦蛇を見れば食に善く目に美麗しく且智慧からんが爲に慕はしき樹なるによりて、遂に其果實を取り食ひ、亦之を己と僭なる夫に與へければ、彼食へり、是において彼等の目俱に開けて、彼等其裸體なるを知り、乃ち無花果樹の葉を綴て裳を作れり、彼等園の中に日の清涼しき時分歩みたまふ、エホバ神の聲を聞しかば、アダムと其妻即ちエホバ神の

面を避て園の樹の間に身を匿せり、エホバ神アダムを召びて之に言ひたまひけるは、汝は何處に在るや、彼いひけるは、我國の中に汝の聲を聞き裸體なるにより懼れて身を匿せりと、エホバ神言ひたまひけるは、誰が汝の裸體なるを汝に告しや、汝は我が汝に食ふなかれと命じたる樹の果を食ひたりしや、アダム言ひけるは、汝が與へて我と僭ならしめたまひし婦、彼其樹の果實を我にあたへたれば、我食へりと、エホバ神婦に言ひたまひけるは、汝がなしたる此事は何ぞや、婦言ひけるは、蛇我を誘惑して我を食へりと、エホバ神蛇に言ひたまひけるは、汝是を爲したるに因りて、汝は諸の家畜と野の諸の獸よりも勝りて、謂はる、汝は腹行て一生の間塵を食ふべし、又我汝と婦の間および汝の苗裔と婦の苗裔の間に怨恨を置かん、彼は汝の頭を碎き、汝は彼の踵を碎かん、又婦に言ひたまひけるは、我大に汝の懷妊の劬勞を増すべし、汝は苦みて子を産まん、又汝は夫をしたひ、彼は汝を治

めん、又アダムに言ひたまひけるは、汝その妻の言を聴きて、我が汝に命じて食ふべからずと言ひたる樹の果を食ひしに縁りて、土は汝のために誦はる、汝は一生のあひだ勞苦して菜より食を得ん、土は荆棘と薊とを汝のために生すべし、また汝は野の草蔬を食ふべし、汝は面に汗して食物を食ひ、終に土に終らん、其は其中より汝は取られたればなり、汝は塵なれば塵に皈るべきなりと、アダム其妻の名をエバと名けたり、其は彼は群ぐんの生なまの母なればなり、エホバ神アダムと其妻のために皮衣を作りて彼等に衣せたまへり、エホバ神曰ひたまひけるは、視よ、夫人我等のひとらの如くなりて善悪を知る、然れば恐くは彼其手を舒べ生命の樹の果實をも取りて食ひ、無限かぎり生なまさんと、エホバ神彼をエデンの園よりいだし、其取りて造られたるところの土を耕さしめたまへり、斯く神其人を逐出しエデンの園の東にケルビムと自から旋轉る焰の劔を置きて生命の樹の途を保守りたまふ、

第一、最も可笑しいのは、太陽の出来たのが第四日であるのに、それまで三日の間に、既に晝あり夜あり夕あり朝あるのが何ういう譯だらう、太陽がなく晝夜朝夕のある理屈はない筈である、地球が日より前に出来たなどに至つては、神としては無學極まる話で、抱腹絶倒の至りである。

第二、七日目の日に神が息んだと書いてあるが、此息んだと云ふことは何ういう事であらうか、神が萬物を捨て置いて構まはなかつたと云ふ事であらうか、そうすると其日の中に、宇宙の凡ての規則が破れて、石が空中に飛び上がったたり、太陽が月と手を引いて天を躍り歩いたりする理屈になる、神が構まいつけなくても、宇宙が規則正しく行くものならば、神は最早無用の長物である。

又此息んだと云ふことが、萬物の創造を終へたと云ふこと
であれば、それから以後六千年即ち二百萬日も休んで居る
譯で、何にも一日と限つた譯でない。

アダムが獨り居るのを見て、彼に適ふ助者を造らうといふ
ので、神が第一に動物を造つたが、アダムには適はなかつた
と書いてある(第二章第十八節乃至第二十節)シテ見るに神
が失錯した譯である、そこで此失錯を回復する爲めに、ア
ダムの肋骨の一枚を取つて女を造つたと書いてある(第二章
第二十一節乃至第二十二節)。

左すればアダムには、人間に不必要な肋骨が一枚あつたが、
若しくは其後に生れた人間には必要な肋骨が一枚足りな
いかである、要らぬものを一枚多く造つてあつたのも、要る

ものを一枚足りない様に造つたのも、何れにしても神の失
錯である。

第三、第一章に書いてある事と、第二章に書いてある事とは、
少しく矛盾して居る點がある。

一、第一章では、人間を造くる前に、諸動物が造くられたと
書てある(第二十節第二十一節第二十四節第二十五節)
第二章では、先づ人間が造くられて後ちに動物が造く
られたことになつて居る(第十九節)

二、第一章では、人間が同日に神の象ちに隨つて造くられ
て居る(第二十六節第二十七節)

第二章では、男が先づ土の塵で造くられて、それから女
が男の肋骨を以て造くられて居る(第七節第二十二節)

三、第一章では、人間は萬物の主宰である(第二十八節)

第二章では、人間はエデンの園の番人である(第十五節)

四、第一章では水が非常に澤山ある(第二節第六節第九節第十節)

第二章では水が少ない(第五節第六節)

五、第一章では植物が澤山ある(第十一節第十二節)

第二章では植物がない、それも雨が降らず、人が地を耕さぬからであると書いてある(第五節)

第四、此第二章のアダム、イブが蛇に欺かれて、終にエデンの園から逐ひ出される話は、何にも猶太人の神から聞いた話でなくて、實は印度の昔の傳説が諸國へ傳はつて、それがバビロンに傳はつたのを、猶太人がバビロンに擒にあつて居

る間に聞いて、それを窃んで自分の國に古くから傳はつて居るやうな風に書き記したのである、此贓品本が神の聖靈に感じて書いたものだと云ふから堪まらない、其贓品を耶蘇教徒共が窃んで、己れの家の礎石にして居るのである、是れは一つ刑事裁判へ引出して裁判せなければならぬ。

原告印度人の申立

私共の國の昔の傳説には、泰初地は美麗なる花を以て蔽はれ、樹には夥多の果實が實つて居た爲め、撓んで居た地の上にも、空中にも、數知れぬ動物が蕃殖して、白象は到る處の森の蔭などに徘徊して居ました、ブラーマの神之れを見て、此地に棲ましむべき人間を造くるべき時だと宣給はせて、大靈の一部を以て男女の人間を造くり給ひ、之れにアハンカーラと言語とを授けられました、アハンカーラとは自覺と申すことで、又言語を授か

つただけで、人間が是れまで神の造りなされたものよりも勝れたものになつたのです。男は女より身體も立派で強壯で力あるやうに、女は男より容も美しく心優しく愛嬌があるやうに御造りになつて、男にはアーヂマと云ふ名を、女にはヘバと云ふ名を下さつた。アーヂマとは第一の人間といふ義で、ヘバとは生活を完全ならしむるものといふ義であります。之れは男に女があつて始めて生活が完全になるからです。そうして其二人錫蘭島に御置きになつて、汝等の子孫蕃殖して、此島のみにて棲むことが出来なく爲つたら犠牲を燐きて我を呼ぶなら其時我が意を汝の子孫に告げん、それまでは錫蘭島の外は未だ人の棲むに適する地が無いから、決して其地を出てはならないと誠められました。アーヂマもヘバも、其教を畏みて幸福に暮して居ましたが、惡の神が人間の幸福を見て羨み、又神の業を害せん爲めに、先づ男の心の中に惡の種子を播いたから、アーヂマが

女の止めるのを聞かず強ひて兩人で錫蘭島から大陸へ来て見たらば、大陸は荒れ地で仕方がないので、再び錫蘭に歸らうと思ふたが神の罰で錫蘭までの地狭がなくなつてしまつた。神が宣給ふには、汝等は最早我が汝等の爲めに造つくりし幸福の地に歸ることが出来なないであらう、我が命を守らざりしにより、地は惡魔の所有となり、汝等の子孫は汝等の罪により困難して生活を送り、種々の罪惡を犯し、我を忘るに至るであらう、されど我後ちにヴァインニユを降して、ヴァインニユの祈禱により、汝等の子孫善に遷り苦痛を軽くせらるることが出来るであらう、と云ふのがあつたのです。其証據は耶蘇の生るる二千年前に出来た、吠陀ベダに出て居ります。耶蘇教の舊約書は耶蘇の生る、前五六百年から二百年頃までに出来たものですから、私の方の衣物を仕立直して着て居ても縞柄で直ぐ分ります。

裁判官

被告其方の申立は如何である。

被告耶蘇教徒

實は左様なる譯も存知せず、猶太教の者か着て居たのを窃んだので、只今原告の申立により、何共一言の異議も御座いませぬ。

裁判長

被告人の申立に依れば、猶太教徒のを窃取したること明かである、又現品を見れば原告の品を仕立直したるものなることは、一點の疑を容れぬ、依て贓品は原告に返却すべく、被告の處分は追て申渡すであらう。

第五、耶蘇教徒は唯一の神を信ずると言つて居るが、此創世紀を能く見るに、決して一神教でなくて多神教である、此章に神と譯してあるのは、希伯來の原語にエロヒムとあつて、

單數でなく複數である、さればこそ創世紀第一章第二十六節に

神言ひ給ひけるは、我儕に象りて我儕の像の如くに、我儕人を造り之に海の魚と天空の鳥と家畜と全地と地に匍ふ所の諸の昆蟲を治めん、

と、神自からが我儕と複數に言ひ居るのを見ても分る、神が獨りなら我れと云はなくてはならぬ筈である、エロヒム(神々)とあればこそ我儕と云ふて通ずるのである、此エロヒムを神と譯したのは、無學文盲で原文が讀めなかつたのかも知れないが、何れ耶蘇坊主の事だから、知て居て胡魔化したに違ひない、併し諺にも隠れたるより顯れたるはなしで、頭を隠して尾を出して居るのは妙である、序に言ふて置くが、神々と書いてある所が、舊約には幾箇所もあるが、耶蘇坊主

は皆な神と譯して居る。

第六、此人間が神の命令に背いて、智識の果實を食したが爲めに、人間の肉體は死すべきものとなつたと云ふのが、耶蘇教の教義であるが、是れが甚だ滑稽な話である、若しアダム。エバが罪を犯さないで、人間の肉體が永久不死であつたなら大變な次第で、今日の世の中は人間で身動きのならぬやうになつたであらう、マルサスは世界の人間の殖ゆるのは等比級数をあし、食品の殖ゆるのは等差級数をなすから終には食品の足らぬ爲め、人間が互に搏噬して食ふならんなどと心配したが、若し人間の肉體が永久不死であつたら、それこそ大變である、マルサスの心配した位のことではない、或學者の計算したのによると、耶蘇教の言ふ所によれば、

天日が創まつてから、今日まで六千年であるから、一夫婦が極僅かに見積りて平均三人の子供しか産まず、又三十歳になるまでは一人も子供が産れないとして、今日存在すべき人数は

初次が 2 、公比が $\frac{3}{2}$ 、項の数が 200

1等比級数の和

$$\sum_{n=1}^{200} 2 \left(\frac{3}{2} \right)^{n-1} = 4 \left(\frac{3}{2} \right)^{200} - 2$$

其の結果は 66180,000,000,000,000,000,000,000,000,000,000

即ち六千六百十八淵人となる、今地球の表面が一億九千七百万方哩で、其内陸地は五千二百万方哩であるから、之を一

實を食つたから、其罰としてエデンの園より逐ひ出されたのみならず、人間の先祖のアダム・エバの犯した罪が遺傳して、人間は未來永劫浮ぶ瀬がなかつたのを、神が已れの愛し給ふ獨子耶蘇を此世に降し給ひ、其耶蘇に種々の艱難苦勞を爲さしめて、人間の身代りごなしたご云ふのが、耶蘇教の教義である。此のアダム・エバを欺ました蛇は、悪魔の化身である。と云ふのであるが、舊約書を見ても、悪魔は後ちから猶太人の考へ出したもので、昔は善惡ともに神のなし給ふと認めて居たのに違ひないのは、以賽亞書四十五章第七節に

われは光をつくり、又くらきを創造す、われは平和をつくり、また禍害をさうざうす、我はエホバなり、我すべてこれらの事をなすなり

とあるので分る、ダビデの言つたことに、唯だ一言悪魔の事

が出で、居るばかりで、充分なことは約百記に至つて始めて見えて居る、それも悪事をなすのは神の許可を得てなしたとある、凡て悪魔の舊約書に現はれるやうになつたのは、猶太人がバビロンに捕はれて居る間に、波斯の火教より窃み取つたものである、それを復た耶蘇教が窃取して、創世紀に附會したものである。

親が罪を犯した故、子をも罰すると云ふのは残酷極まる法律で、未開なる野蠻人の外にはない、アダム・エバが罪を犯したから、我々何百代の子孫までも、其罪が傳つて、一所に罰せらるゝと云ふのは、罪三族を夷すと云ふ暴秦の法よりも尙ほ残酷である、其残酷無慈悲極まる神を、天に在ます我等の父とか、恵み深き神とか言つて、隨喜の涙を垂れて居るのは、

迎ても本氣の沙汰とは思へぬ、又罪のない者を、罪ある者の身代りとして苦しめると云ふことは、野蠻國に行つてもない話で、狂人の外は爲し得ぬことである、甲の人の當然受くべき責を、乙の人が代つて受けて、それで相濟むと云ふのは、金錢の貸借の時に限る、金貸は甲に貸した金を、乙が返そうとも、丙が返そうとも、己れの手金さへ返れば満足して居る、人間が罪惡を犯せば、罰を受けるのも人間であるのが當然である、罪なき耶蘇に罰を受けさして満足して居ると云ふのは、金貸主義である、耶蘇教の神は今日手提鞆を提げて東京市中を徘徊して居る、高利貸と同じ動物である、創世紀に神に象ざりて、人間を造つたとあるは、此高利貸の事だ。上に述べた如く人間の墮落と稱するアダム、エバがエデン

の園から逐ひ出された事は、贓品で其上理屈に適はない事である、又アダム、エバの罪惡が、子孫まで遺傳すると云ふ、所謂罪惡遺傳説と云ふものが不合理千萬な言として打ち破られたとすれば、人間に代つて罪を受けたと云ふ耶蘇も、全く無用の贅物である、元來私生兒の法螺吹が、人間の身代りだなど云ふは、片腹痛い話である、舊約書に書いてある事柄は、唯耶蘇教の教義の基礎となつて居る人間墮落の話の妄誕不稽であるのみならず、其他にも詐欺、虚誕、虐殺などの多き事は云ぬにしても、猥褻極まる事が多くて、堂々たる經典が風俗壞亂の事項を以て満たされて居る、是れ宜しく出版禁止を命へずきものゝ種類である。

第一嘘の種類も澤山あるが、其中で創世記第六章より第九

章にあるノアの洪水の話は、今より四千年程前に世界中に洪水があつて、ノアの一族の外、皆んな溺死したと書いてあるが、今より四千年前に世界中に大洪水のあつたと云ふのは、何處を押ししたらそんな嘘が出る、今日地質學上一つもそんな證據はないのみならず、其頃は埃及も印度も繁盛して居て、其頃書いた吠陀べいたなぞ云ふ書物が、今でも残つて居る、耶蘇宣教師の中には、此洪水と支那の禹の時の洪水と同時だなご、妖怪なことを云ふ輩が居るが、支那のは黄河の溢れたのである、禹の時代ばかりではない、今日まで節々黄河の汎濫したころがあつて、人間の之が爲めに死する者は固より少なく無かつたであらうが、皆んなは滅亡して居ない、ノアの一族の外は悉く滅亡したあご云ふのと少しも合はな

い、一言にして世界を造つた神が、面倒にも方舟を造らせた、山へ行つて熊や虎を擒にしたり、海へ入つて鯨や水月魚を捕つたり、濁水へ入つてバナルスバルスなど捉へて、二疋づ、方舟の中へ入れさせて、天の水桶の口を開けて、四十日間も久しく雨を降らさずとも、御得意の一言にて、世の中の悪人を盡く滅絶することが出来そうなるものである、如何に神の命令でも、小さな方舟の中に蛇だの、蝮だの、蠍だの、蜈蚣だの、蚯蚓だの、守宮だの、蛞蝓つむぎなどと、一所に住むことは、ノアの一族から格別、余輩は水に溺れて死んでも、御免である、而已ならず諸動物の糞尿が四十日間もあつたのに、ノアの一族は鼻と云ふものがなかつたか知らぬ、吾輩は考へて見るばかりでも嘔吐が出る。

其れのみならずノアの三人の小供の子孫が繁盛して、世界人類の祖先と爲つたごあるが、埃及人や印度人や支那人はごうであるか、其頃より連綿として今日まで生存して居るではないか、ノアの子孫が亞米利加へ行つたことは、舊約書中終に見えないが、亞米利加に西洋人が行く前に、既に今日住つて居る土人はナヤンと棲息して居つたではないか、世界の人類がノアの子孫のみでない事は、勿論知れ切つた事である、こんな工合に吟味すれば、嘘話がまだ々々澤山あるが、冗長に渉る虞れがあるから、是れ丈にして、舊約書の猥褻な事の例に移らう。

アブラハムご云ふは極めて信神家として、新約書にも舊約書にも引き、神も殊に愛した者で創世記第十二章第二節及

第三節に

我汝を大なる國民と成し、汝を祝み汝の名を大ならしめん、汝は祝福の基となるべし、我は汝を祝する者を祝し、汝を誑ふ者を誑はん、天下の諸々の宗族汝によりて祝福を獲ん

と神の告げたる位の男なるに、女房を持ちながら、其女房の侍女に孕ませ、又妾を幾人も持つて居た淫亂家である。

又アブラハムの孫のロトは、神がソトムと云ふ都を亡ぼす時に、救ひ出した唯獨りの義人と見られた男であるが、此男は己れの娘を二人共孕ました事を創世記第十九章第三十一節より第三十六節に書いてあるが、其記事は猥褻讀むに堪へないものである。

路得記にあるルツの行爲の如きは、車夫馬丁と雖も口にす

ることを憚る淫猥なる記事である、これが福音書の詐欺捏造して耶蘇の祖先だこ嘘をついて居るダビデの五六代前の親である、其他重婚娼妓蓄妾等猥褻な事が甚だ多い。

虐殺の多い事は、神の見て義人と刈るが如く、他國に攻入して金銀財寶を掠奪したり人の妻を奪ふて其夫を殺したり色々を暴戾殘虐をやつたのでも分る(撒母耳後書第八章乃至第十一章)

第九 耶蘇教傳播の方法。血と火

斯の如く妄誕不稽を以て成り立つて居る耶蘇教の盛になつたのは、如何な譯であるかと云ふに、今日でも救世軍の徒が麗々と掲げて居る通り、血と火とに依つてである、昔から耶蘇教を擴める唯一の方法は、人を殺し家を焼き強ひて耶

蘇教を信ぜしむるのである、其事は苟も歴史を繙いた者は、誰れでも知つて居る所である。

初めて耶蘇教の羅馬に傳はつた時に、羅馬にコンスタンチン云ふ帝王があつて、二十年間もつれ添ふて、三人迄も子供を生んだ己れの妻ファウスタを殺し、己れの舅リチニウスを殺し、己れの子クリスプスを殺し、己れの女婿を殺し、己れの従兄弟を殺した悪虐無道の人間(若し人間と云ふべくんば)が、己れの國の僧侶に罪障消滅の宣言をせよと頼んだら、幾くら帝王でも、斯の如き罪惡は、どうしても消滅したことは宣言する事が出来ないと斷つた、併し耶蘇教徒は己れの宗旨に歸依して布教の加勢をするなら、罪惡消滅の宣言をしよう云つたので、喜んで耶蘇教になつて是れを國教と

し、其宗旨の傳播に従事した、元來斯の如き悪虐無道を男だから、信ぜぬ者は片端から殺したり財産を奪つたりした、其頃の羅馬國は殆んど全歐洲と小亞細亞地方とを一團と爲して居た國だから、其國の帝王が暴力を以て宗教を擴めた故、是れまで穴藏に匿れて日の光を拜むことの出来なかつた耶蘇教徒が、忽ちに何千万人と云ふ信者が出来るやうになつた、耶蘇教徒が喜んで此悪虐無道なコンスタンチンに、コンスタンチン大帝と尊號を奉つた

耶蘇の十字架にかけられたのだの、其弟子中の或者が逆に十字架につけられた事などを、耶蘇教徒は残酷な事の例に擧げて、よく無智な婦女子を泣かせるが、耶蘇教徒自身が布教の目的でなした行の残酷なのは、是れに幾百倍越えて居

るか知れぬ。

五世紀の始頃アレキサンドリアにロバチアと云ふ若い女があつた、女ながらも博學で、哲學は言ふに及ばず、幾何や物理などに通じて居た、此の女が多くの人を集めて、種々の哲學上の問題を講じた、所が其の集り聽く者が雲の如くであつて、殊に耶蘇教徒の如く無學無智の貧民でなくて、多くは富貴の人で、而かも多少學問のあつた人であつた、耶蘇教の僧侶等は頭痛で堪まらない、アレキサンドリアの耶蘇教の僧正シリルも頭こなつて僧侶を集め、ロバチアの講義所へ押かけ、其の女を捕へて裸躰となし、大道を引きつり歩いて、後棒で打ち殺して仕舞つた、若い女を裸體で大道を引き廻はすとは言語道斷の話で、逆も逆磔や火刑の比ではない、併

し其の残酷さ加減は是れに止らない、裸娘を棒で打殺した後、屍骸を寸々に切つて其上貝殻で肉を骨よりこすぎ取り、其後又た之れを火に投じて焚いた、併し此の残忍無慈悲の耶蘇教僧侶は言ふに及ばず、其の頭のシリルも決して何の罰をも受けぬのみか、一言の譴責すら受けなかつた事がある、我輩が殊に此に大書し置かざるべからざるは、此のヒバチアを手始めとして、ガリレオは地動説を唱ひたとて終身獄に投じた。

シヨルダノ・プルノは地球以外に世界があると言つたので、無残にも彼を火刑に處した、若し一々此の類の例を挙げたら、此の外にもまだとと澤山ある、

一方では斯くの如く、有らゆる方法を以て學者を殺す、獄に

投ずる、書籍館を毀つ、書籍を焚き棄つるといふ具合に、種々様々の手段で、人間の新知識を得ぬ様、人間を暗愚ならしむる様に勉むると同時に、他方では耶蘇教徒で無き者を、出来る丈け残酷な方法で苦しめ、彼等を撲滅して以て己れの宗教を傳播せんと試みた、其れも例は澤山あるが、其中の大なるものを擧ぐると、異教信者を撲滅せしむる爲めに一千二百四十三年に法王インノセント四世が、宗教裁判といふものを起した、勿論其頃迄も所々の僧侶共が、己れの勢力に任せて、之れに類似の事はやつて居たのであるが、此時に始めて宗教裁判と名の付くものを伊太利、西班牙、獨逸及佛蘭西に起して、大仕掛で異教信者を苦しめ始めた、殊に一千四百七十八年十一月に法王が出した命令などの如きは、残忍

猛悪の極である、異教信者を詮議し出して或は生ながらに火に投じたり、或は獄に投じたり、或は其財産を残らず奪ふたりしたのである、併し其の詮議の方法は、公然と告訴を受理して公然味吟するのではない、匿名の密告を受けて證據も何も探索せぬ、唯だ拷問の方法によるのである、殊に最も甚しき残忍といふのは、死人の墓を發き、其屍体に凌辱を加へて之れを焼き棄つるなどするので、佛説の阿鼻叫地獄、叫喚地獄も斯くやと許りに思はるゝ位で、今日聞くも覺えず人をして戦慄せしむる程である、併し夫れでも例の耶蘇は得意の偽善主義で、『殺すには血を流さずして出來得る丈け恩惠的方法』といつて、生きながら焼き殺し、或は拷問は一度極りであると定めて、毎日毎日問拷を加へて言ふ様、拷問

は一度だが、特別の恩惠で暫時翌日まで中止してやるのだなどと言つて濟まして居る。

西班牙の國のみで、一千四百八十一年から一千八百八年までに、此の宗教裁判の爲めに、トルクエマーダの手にて

- 一、生きながら火に投せられたる者、一萬〇二百二十人
 - 二、死人の像を造り之を焼き殺せし者、六千八百四十人
 - 三、其他の方法により刑罰を加へられたる者、九萬七千三百七十一人
- チエゴ・デザの手にて

- 一、生きながら火に投せられたる者、二千五百九十二人
- 二、死人の像を造り之を焼き殺せし者、八百二十九人
- 三、其他の方法により刑罰を加へられたる者、三萬二千九百五十二人

- 一、生きながら火に投せられたる者、三千五百六十四人
 - 二、死人の像を造り之を焚き殺せし者、二千二百三十二人
 - 三、其他の方法により刑罰を加へられたる者、四萬八千〇九十九人
- アドリアン・デ・フレンシアの手にて
- 一、生きながら火に投せられたる者、一千四百二十人
 - 二、死人の像を造り之を焚き殺せし者、五百六十八人
 - 三、其他の方法により刑罰を加へられたる者、二萬一千八百三十五人
- 合計十四萬八千六百七十四人である。
- 加特利教旗 (La Bandera Catholica) といふ加特利教校美雜誌一千八百八十三年七月二十九日發刊のものに宗教裁判所の手により
- 一、生きながら火中に投せられたる者、三萬五千五百三十四人

- 二、像により焚き殺されたる者、一萬八千六百三十七人
 - 三、其他の方法により罰せられたる者、三十九萬三千五百三十三人
- 合計四十四萬七千七百〇四人
- 是れが耶蘇僧侶の手にある新聞の申分で、出来るだけ數を少なくしただらうから、深く信據するに足らぬが、夫れでも生きて居る人間四十三萬人といふものを或は焚き殺したり、或は財産を奪つたり、或は獄に投じたりして居る、殊に耶蘇教根性を顯はして居るのは、金持ちには金を出させて宗教裁判を免るす事にしてあつたのだ、耶蘇が蠱くひ錆くさり盗うかちて竊む所の地に財を畜ふること勿れなど、口だけ立派に言つたとて仕方がない、古から耶蘇教徒の多くは『地獄の沙汰も金次第』主義でやつて居る、金を全智全能と崇

めて、今日でも耶蘇坊主が貧民に金を與へて信者にならして居るのは、事實上疑ひもないことだ。

さて此宗教裁判が止むと、今度は一千四百九十二年三月三十日には、猶太教のものは老幼男女貴賤貧富を問はず、残らず七月の末日までに、西班牙國外に立退きを命じた、而かも金銀は一文も携ふることを許さぬ、若し背く者は死刑に處するといふので、老人の手足の叶はぬ者、病氣にて身動きのならぬ者、女の未だ産褥にある者、嬰兒を抱く者、瀕死の病人を背負ふ者、婦女子の手を携ふる者が、而かも一文の錢をも携へずして、數百年來住み馴れし故郷を出立せる有様を見て、誰れも皆な涙を流して泣かぬ者はなかつたが、耶蘇教の坊主だけは此の哀れなる人々の面前にて、咒咀的の演説を

あして居た、余輩數百年の今日でも、其の出發する人々の有様を想へば、覺えず涙が下るのに、耶蘇坊主等の腸は、鐵か將た石であるか、斯る殘忍酷薄の行を爲して、毫も哀れだと思はないのは、實に禽獸にも劣る話である。

併し耶蘇教の血と火との主義は、是れに止まらない、一千五百二年二月には更に令を發して、神の敵は四月の末までに盡く國外に退去を命じた、此の時の耶蘇の神の敵といふのは、回教信者の事で、其前回教信者が西班牙に王國を建て居たが、信教の自由、政治上の自由を約束して、耶蘇教徒に降服したのであるのに、例の耶蘇教徒得意の食言をなして、國外に放逐したのである、而かも其の條件は猶太教徒を放逐した時よりも更に一層殘酷なのである、即ち金銀を携ふるこ

ごを禁じたことは同じながら、猶太教徒は何れのところへなりと勝手に行くを得たに、回教徒は回教の國へ行くことを禁ぜられたのである。若し其れに違背すると、直に死さういふ嚴罰であつたのである。

併しこれは西班牙のみの話である。歐洲の他の諸國に於ても、同じく此の殘忍猛惡の方法で、異教信者を絶ち、耶蘇教を播むることに勉めた。其の結果が御目出たい中世紀と稱する暗黒時代が出来て、心の貧しき者即ち愚人のみの世と爲り、獨り耶蘇教徒が跋扈して、耶蘇教萬歳と云ふ様にあつたのである。

だが耶蘇新教の徒は、夫れは舊教の爲した業で、吾輩のなした事ではないと言ふ者があるかも知れぬが、新教とても決

して爲ないことはない。

カルビンがゼルベトウスを焼き殺したのは如何であるか、勿論彼等は舊教の如く法王が首に爲つて、全体一致で、悪事をなすことは無いが、個人として團體として、爲し得らるゝ時は、必ず血と火との力に訴へて居る。其以後、十字軍宗教裁判おごの爲め、幾千萬人の無辜を殺し、幾萬の家を焼いたか知れない。中世紀で耶蘇教徒外の學者で焚殺禁錮等の迫害を受けぬ者は殆んどあるまい。近來でも始めて亞米利加や印度や濠洲へ、耶蘇教を擴めた時に殘忍猛惡の手段を用ゐて、人を殺し、家を焼き、豺狼も啗ならざる罪惡を犯したことは歴史に大書してある。今日支那や朝鮮に耶蘇教の擴めらるゝ手段を見ても、彼等が宣教方法の一斑を知ることが出

來るであらう。

亞米利加や、印度、南洋へ傳導した時の方法は如何である、歴史といふものが世の中にある限りは、耶蘇新教が傳播した方法は血と火とでないとは云へまい、新教は血と火との外に金と云ふ方法を用ひるのである。

但し斯の如く論ずること、夫れは耶蘇教徒の狂人共がなした業で、耶蘇教其ものには何の關係もないといふ者があるかも知れぬが、此章の言ふ所は耶蘇教を傳播するに、血と火との力によつたといふのである、よし之れを狂人のなしたものとにしても、耶蘇教は此の方法により傳播したものであることは、争ふ可らざる事實である。

回教は哥蘭か刀かとして、兵火を以て宗教を擴めたと稱せら

るゝも、耶蘇教の如く暴虐無道なる事は決して爲さなかつたのである、到る處學術宗教の自由を許して居つたのである、平和の神など耶蘇教は嘘をつくが、舊約書には戦争の神、嫉妬の神とあつて、明らかに血と火との神と書いてあるのだ。

第十 結論

以上陳述したる所に由りて、概括的に之を論ずるといふと、耶蘇教は極めて淺薄で、且つ妄誕不稽なる事のみ多く、自らは文明國の宗教だと言つて威張つて居るが、其の實三文にも値せぬ鹵莽極まるもので、第一神は唯一であつて天地萬物を創造したといふ耶蘇教の第一義が既に潰滅に歸して居るのみならず、人間がアダム、エバの罪を犯したるに因り

墮落したといふとや、耶蘇が人間の罪を償ふが爲めに神の降した唯一の子であるといふとや、耶蘇に就きて古より存じて居る種々の預言などが、悉く嘘八百で、毫も信ずるに足らないものである。

耶蘇は神の子であるといふが、實は女髮結の私生兒で、生前に猶太の古からの訓誡を吹き立て、自ら猶太人の王であると言つて、法螺を吹き廻はつて歩行るいて居たのである、して其の耶蘇の教といふものが、亦た極めて狹隘に極めて自尊に、他を排撃すると許りて、毫も寛裕なる餘地を有して居ない、今日新約全書や、其の他耶蘇の傳記及び教義として教へらるゝものは、悉く希臘哲學、舊約全書、佛教の傳説等によりて、後人の附會捏造したもので、其の人心を蠱惑し、社會

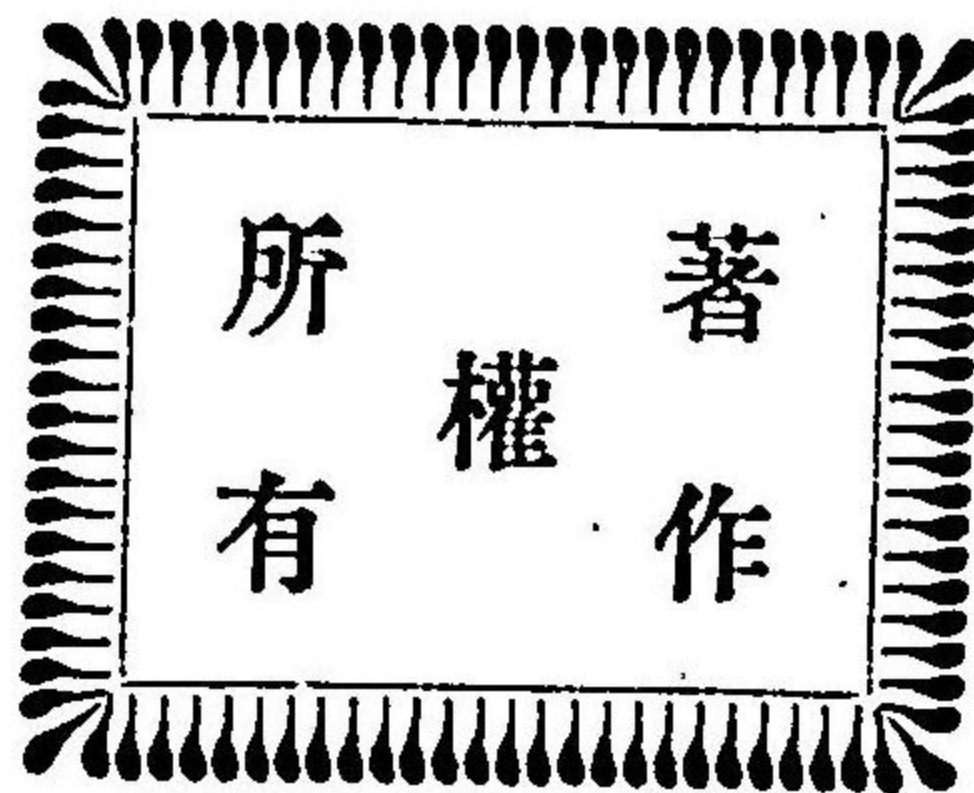
を荼毒する弊といふものは決して少くない。

然らば斯く妄誕不稽にして且つ淺薄なる宗教が、如何にして傳播したかといふに、是れ全く前にも言つた如く血と火とであつて、或は人を強迫し、或は啗はすに利を以てし、或は學者を殺し、或は書籍を焼き、出来る丈け人を愚ならしめたからである、故に耶蘇教傳播の前には常に腥膻なる風が吹き荒らして来る、桀紂の様な暴戾無道なるコンスタンチンの如きですら、大帝として仰かるゝ程であるから、耶蘇教なるものも大抵推測し得らるゝではないか、テ西洋では古から傳つて居るものだから、汚穢の中に棲んで居る豚が、其の臭氣を感知しない如く、彼等は些も耶蘇教の不都合なる事に氣が付かない、偶々少し位氣の附た者があつても、祖先傳

來の重器であるといふので、缺け土瓶ご知りながら、之を尊奉する迄で、無くとも、其れを打ち毀はして棄て、仕舞ふといふ程には至らないのである。斯る妄誕不稽なるものを日本帝國、而かも神道もあり儒教もあり佛教もありといふ此の日本國に持ち來りて擴めやうとする人間の氣が知れないのみならず、之を信じやうとする人間は猶更滑稽の至りである。若し西洋から來たといふ譯で無暗に有り難いなら、詰まらぬ石を崑崙から持つて來たと言つて有り難がつて居ると同じ事で、是れ愚人の爲に非ずば必ず狂人の行で、逆も常識ある者の事ではない、彼等は飯喰ふ爲めにやつて居るなら洵に氣の毒の至りであるが、假面を被りて忠實らしく粧ひ、良民を惑亂して之を邪道に導き、若しくは彼等を

欺瞞して財貨を搾ぼるこいふに至つては、言語同斷である予輩は是非とも此等の動物を掃蕩して日本國內より逐つ拂ふべき責務がある。

明治三十五年七月十日印刷
明治三十五年七月日發行



著者

進藤巖

發行者

東京本郷區本郷六丁目二十五番地
谷村清太郎

印刷者

東京市京橋區日吉町十番地
前田蓮次郎

印刷所

東京市京橋區日吉町十番地
近藤商店

發行所
特約賣所
大所

東京市本郷區本郷六丁目
東京市本郷四丁目五番地
京都市西六條
京都市東六條

東洋堂
文興藏
明法館
教書院

正價金三拾五錢

發行所

京都東六條

法藏館

羽根田文明居士著

天理王辨妄

全一冊

正價 金拾錢
郵税 金貳錢

本書は佛敎幻燈演説に有名なる文明居士が各地巡歴の際該教會蔓延の地に臨み種々の危険を冒して彼が秘密的内部を探り以て邪妄の邪妄たる實證を發見し比較的邪正の通路を指示し最も精密に利害得失を論じ盡して毫も餘地を與へず一擊の下に數百人の教徒をして其邪妄を翻じ眞理の軍門に降服せしめたるは居士が實験に徴して明著なり破邪顯正に従事せらるる諸君は必ず一本を購求し以て彼等を打破するの鐵棒としたまふべし

心鏡一名天理狂退治

全一冊

正價 金拾錢
郵税 金貳錢

天理教會の恐俗を籠絡して世道人心を害すること誠に深くして且つ廣し世の志士仁人夙に其弊を憂へて駁論の書を著はして膺懲を試みる者あるも其肉を抉し骨を刺し妖魔を殲して遺骸なき者未だ本書の如きはあらざるなり本書は博覽雄辯に名ある神宮教少教正松木時彦氏の演説筆記にして同中教正春樹氏の題辭吉岡沛雨氏の題歌亦た大に光彩を添ふ世教に志ある者は必ず一讀あるべし

瀨味祐成著

天理摧魔窟

全一冊

正價 金拾錢
郵税 金貳錢

夫の神道の一部にある天理教會、其名や文明なり美化なり然れ共其所爲たる聖世を汚濁し發育を遮害する虚構妖怪の淫祠而も鄙陋猥褻の媒者なるに過ぎず左れば園丁を以て自ら任する者國民として氣慨ある者進んで共に之が排斥誅劔に従事せざるへからず是れ敢て此著ある所以なり著者識す

發賣所

東京本郷四丁目

文明堂

翠村濱口惠璋氏著

◎古英雄と宗教

定價 金二十錢
郵税 金四錢

（佛敎批評）氏が所謂英雄とは、天地の眞理に順應したるもの、名利以外に立ち攻々として勉め勵みたるもの、宗教の眞趣味を解し得たるもの、此の三者即ち宗教的素養を缺けば、到底眞の英雄と稱する事能はずと断定し個の三を完備せるものにして、從來世人に英雄として知られざる人も、今や氏の公平なる試金石に照されて、躍々として紙上に顯はれたり、此れ如何に氏が眞摯の筆其妙處を指摘せしものなれば、その英雄が宗教に對する思想及び行為の偏へは、一讀の上果して讀者が柏蔭三漢せらるるの時あるを保す、然かして本書は總て正史の稗史を涉獵せし結果、原文の儘を抄出したるものなれば、殊に國史諸種の書を反讀するの勞を省き、一目の下に所謂英雄の思想觀念を悉知するを得るは、偏へに著者に對して多謝するの勞に志ある人々是非一讀を要すべきを信ず（製本美なり）

◎心靈上の修養

定價 金卅五錢
郵税 金四錢

近くは古「英雄と宗教」の著者として知られたる濱口翠松氏が心靈上の修養に就て其所記所感述べたるもの、全編二百六十頁佛陀と衆生、佛陀と人、信仰の生涯、人と人との五章に分ち聖人の訓言を引證し來りて靈界の光明をか、く、其説く所穩健にして、然も熱情紙面に溢れたり、故に苟も憂愁苦悶の人、之によりて活復するを得べく、蘇生するを得べし、夫れ現今の宗教界に足らざるものは信仰なり修養なり、此書信仰を求むるもの、先覺者たり修養に意を注ぐもの、好伴侶たり（中央公論評）

發行所

東京市本郷四丁目

文明堂

2/9/35

安藤鐵腸著

◎天理教大斷案

定價 金十五錢
郵税 金四錢

公平なる觀察は局外者にあらざれば到底よくせざる處、由來天理教の書多くは佛者の手に成る、其公平なる評論の出でざる豈故へなしとせんや、本書は鐵腸氏が一、宗教として天理教を觀察す二、天理教々々を論ず三、天理教祭式を論ず四、天理教々々祖を論ず五、日本國民と天理教六、佛基兩教と天理教八、天理教大斷案等の各章に分ち、銳利の筆端、痛快の論陣縱橫無盡に評論し遂に大斷案を下したるもの其の公平無私なるは言ふまでもなし、苟しくも世教に志なるの士は一讀せざるべからず

◎天理教退治策

定價 金二十錢
郵税 金二錢

本書は外、天理教其物に向つて難駁を試みんとするよりは寧ろ主として内、佛敎家が天理教に對する改革若しくは豫防等の方法を講せらる、ための參考に供せんとしたるもの文章も煩瑣に亘らす俗様に流れず公明無私に其の利害得失の關係を明にし四號活字によりかなを添へたれば誰人にも了解することを得る良書なり

◎基督教と佛教

定價 金十五錢
郵税 金四錢

本書は基佛二敎に關する大家の論説を蒐集したるものなりされば駁邪家は勿論苟しくも二敎の關係を知らんと欲する者は一讀の要あり

賣捌所

東京市本郷

文明堂

新刊廣告

川上貿易事務官序文 角田蕪城編

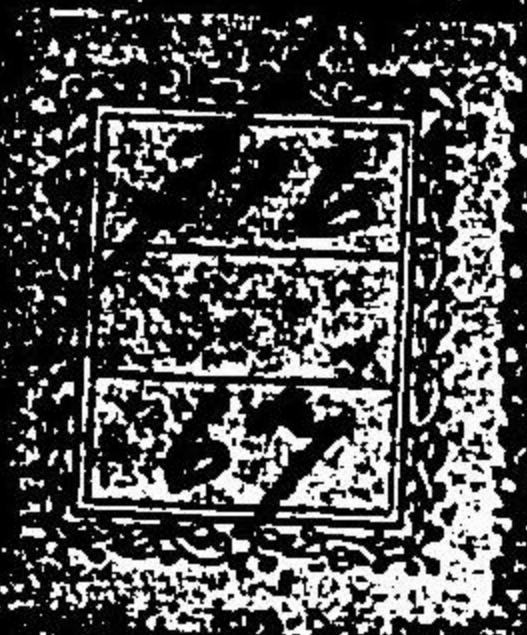
浦潮案内

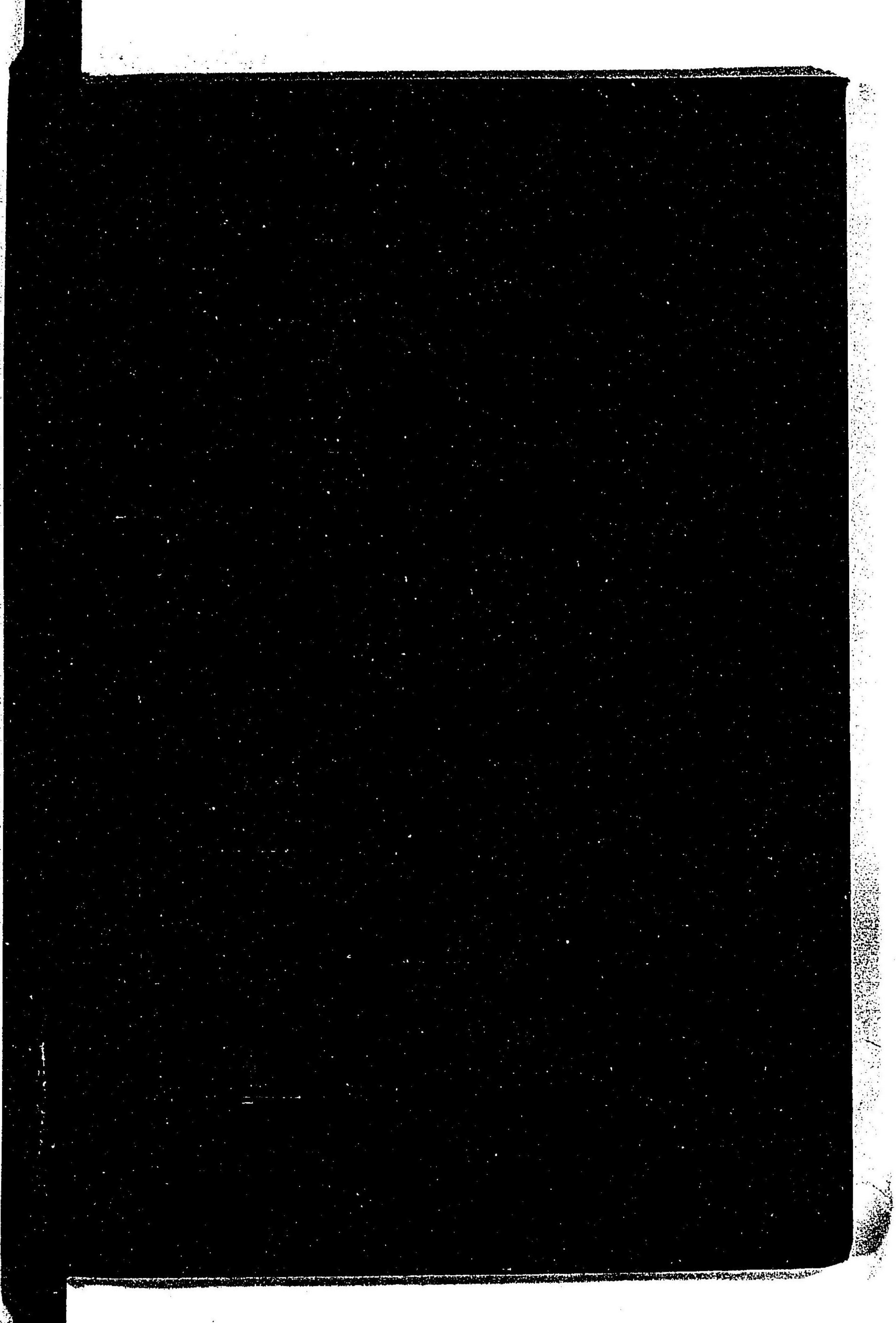
寫真版十一種挿入
製本美麗二百頁
正價金四拾五錢

●圖面 日本海航路圖、歐亞鐵道連絡圖、浦潮港市街圖

十年浦潮港に居住するもの未だ浦潮を知らざるなり始めて浦潮港を訪ふもの亦た容易に眞の浦潮港を知る能はざるなり何となれば浦潮の發達は最近三四年に在り浦潮の進歩は急轉直下的なればなり西伯利亞大鐵道全通後に於ける最新の浦潮港を知らんと欲せば是非とも浦潮案内を讀まざるべからず本書は最近の材料に依りて各般の事項を網羅し浦潮港に居留するもの及び渡航者の爲めに最好唯一の指針たるものなり

發行所 東京 日露經濟會
發賣元 神田區神保町 東京 京堂





020299-000-8

316-67

白粉を洗ひ落したる耶蘇

進藤 虚舟(巖) / 著

M35

ABI-0105

